

2003年度
キリスト教活動ハンドブック

明治学院大学宗教部

新入生のみなさんへ

学長 脇田 良一

学院チャペルでのキリスト教の礼拝形式による入学式に、新入生のみなさんは等しく強い印象をもたれたと思います。

みなさんは、これから、明治学院大学の建学の精神であるキリスト教主義教育に基づく力強い精神的な基盤に接し、さらに「キリスト教の基礎」を始めとするキリスト教領域の科目を履修し、みなさんの心を健やかに豊かなものに育てていただきたい。それも、日々の学生生活のなかで、あるいは学院チャペルの静寂な安らぎのなかで、自ら求め学んでほしいと思います。

そのことは、在学中はもちろん卒業後も、皆さんの心を支え、生きる強い励ましとなりつづけると信じます。

そして、来るべき学院チャペルでの卒業式における祈りと励ましは、いつまでも母校明治学院大学への「なつかしさ」とともに心に刻まれるものと思います。

皆さんの入学を心より歓迎し、明治学院大学における学生生活が充実し、人生の導きを見いだすことを願います。

明治学院大学のキリスト教精神

副学長 鵜殿 博喜

私学は、例外はあるでしょうが、一般的には、志のある人（たち）が教育の理想を抱いて建て上げた学校です。そのような数ある私学のなかで、明治学院大学は建学の精神をキリスト教に抱いています。キリスト教といっただけでは漠然としていて、意味がよくわからないかもしれません。明治学院のキリスト教は、幕末にはるばる大平洋を渡って来日したヘボンその他の宣教師たちのクリスチャンスピリットであるといつてよいでしょう。ヘボンが医療活動しながらキリスト教を伝えたということは、21世紀のこんにちに生きる私たちにもいろいろなことを示唆してくれています。人間の魂の救済（信仰）と肉体の癒し（世俗の活動）はけっして矛盾するものではなく、キリスト教は魂と肉体の両方を含んだ全人格的宗教だということを、ヘボンたちは教えてくれました。それはまたフロンティアスピリットでもあります。明治学院百数十年の歴史は、社会で活躍する多くの人びとを輩出したという意味で、フロンティアの歴史と言えます。

明治学院大学は、学生の皆さんにキリスト教の信仰を押しつけるようなことはいっさいいたしません。ただキリスト教とはどういう宗教なのか学んでほしいとは思っています。そこで、必修科目として「キリスト教の基礎」という科目を設けています。これは明治学院がその存在を証明するための中核的科目です。時代が進み、科学が進歩すれば宗教はなくなると思う人がいるとすれば、それはとんでもない誤解です。現代の世界を見れば、宗教がどんなに重要かわかりますし、宗教の理解なくして世界の人びとの相互理解はむずかしいということも、現代においてますます明らかになってきました。明治学院大学に入られたみなさんには、長い歴史と建学の精神から生れた伸びやかでリベラルな雰囲気の中で、存分に学び、存分に活動してくださることを願っております。

ミッションとヴィジョンの明治学院大学

宗教部長・法学部教授 鍛冶 智也

ようこそ！明治学院大学へ、そしてキリスト教活動へ。心から皆さんを歓迎いたします。

これまでの高校生活と異なり、大学では皆一緒に強制されて参加する行事はほとんどありません。授業の履修にしても、さまざまな活動への参加にしても、学生一人一人の意思と選択、すなわち皆さんの自主性に任されています。このことは、ただじっと待っているだけでは、大学生活は充実しないことを意味しています。積極的に参加して、学生生活を有意義なものとして下さい。大学宗教部も、多様なプログラムを皆さんに提供しております。次のページから基本的なメニューを掲載しますが、どれも「あなた」が関わることができるものです。感動するものであったり、楽しいものであったり、考えさせられるものであったり、時ににがいものであったりしますが、どれも良薬であることを保証します。

さて、「明治学院大学は、ミッション・スクールだ」という言い方をすることがあります。これは、アメリカの教会が派遣したミッション（使節団）の設立した大学だ、という意味合いから、そもそも宗教的・社会的なミッション（使命）を掲げた大学である、という広い意味も込められていると思われまふ。ミッションとは、そもそもあることをする時に、根源的な「なぜ？」に答えることです。そこから発展して、その「意味」を多くの人々にも伝えることも、ミッションと呼ぶようになりました。国連などの国際機関が、さまざまな国に行って現地で支援活動をするを、「ミッションに出かける」と言ったりするのは、このためです。

そして明治学院大学のミッション、すなわち「建学の精神」は、「基督教による人格教育を基礎とし、広く教養を培うとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的応用能力を發揮させること」(学則第1条)であり、「キリスト教精神、リベラリズムの伝統、国際主義・グローバリズムの実践」(1996年6月14日の明治学院120周年宣言)であります。すなわち、明治学院大学は、皆さんひとりひとりを、自らの主体性・自主性に基

づいて、一人の地球市民として、いつでも、どこでも、志をもちつつ社会的な役割を担い続ける知性ある自由な人格として、育成することを謳っています。このミッションは、あなたと大学と、そして世界との関係性を示しています。あなたは、この大学の重要な構成員なのです。

明治学院大学は、同時にヴィジョンも有しています。多くのさまざまなヴィジョンが、これまでの大学における教育と研究の諸改革の原動力となってきました。ヴィジョンとは、人間の未来への自由であり、「可能なものへの創造的情熱」(コルゲン・モルトマン)と理解されています。

そうしたヴィジョンの一つに、「真理はあなたたちを自由にする」(ヨハネによる福音書8:32)があります。これは学生手帳にも記されている言葉ですし、世界中の多くの図書館と同様、明治学院大学図書館の入口にも、横浜校舎図書館にはラテン語で、白金校舎図書館にはギリシア語で記されています。キリスト教精神に基づく学問の自由の価値観を示すこのヴィジョンの具体的な多くの事例に、皆さんは、キャンパス内のいたるところで、これから出会うことになるでしょう。この「出会い」こそが、大学における「学び」にほかなりません。

ヴィジョンもミッションもない共同体は、存在意義がないのはいうまでもありませんが、ヴィジョンのないミッションは、目指す理想のない貢献、地図のない冒険、理念なき職業人、精神なき専門家に過ぎません。そして、ミッションのないヴィジョンは、使命なき野望、絵に書いた餅、空虚な夢想家、心情なき享楽人に過ぎません。

あなたの明治学院大学は、ミッションもヴィジョンも共有する大学であり、それを希求し続けています。

ミッションもヴィジョンも共有され、そして「生きたもの」として存続し続けるために、明治学院大学の学生である皆さんに期待することはかり知れないものがあります。これから2つのキャンパスで展開される本学のキリスト教活動のさまざまなプログラムで、皆さんと「意味ある出会い」がもてることを、とても楽しみにしております。

大学チャペルと宗教活動について

学院牧師 金井 創

新入生の皆さんが通学する横浜キャンパスには近代的で開放感あふれるチャペルが、そして白金キャンパスには歴史の重みを感じさせるチャペルがそれぞれ置かれています。これらチャペルは学業を中心とした学生生活との直接の関係はないように思われるかもしれませんが、しかし、キリスト教精神を土台とする人格教育を建学の精神とする明治学院大学において、チャペルはこの精神を目に見える形で表している象徴的な建造物でもあります。

ただチャペルも建物がそこにあるだけでは、その存在意義の半分しか満たすことができません。大いに活用されてこそ真価が発揮されるのです。ここでは授業期間中、毎日大学礼拝（チャペルアワー）が行なわれています。

大学は決められたカリキュラムをこなすだけの学びではなく、自ら学ぶ機会や対象、テーマを探す場所です。そうした学びを通して自分なりの世界観、人生観、価値観そして真の教養を身につける場所でもあります。その目的のためにチャペルはさまざまなチャンスを提供しています。上記のチャペルアワーもその一つ。

日本では宗教というと敬遠されるか、毛嫌いすらされる傾向があります。ところが留学したり、ある程度長期間海外に滞在したりすると多くの人が「あなたの宗教は？」と問われた経験を持っています。世界の人々と出会っていくのに宗教的な素養は欠かせません。世界の多くの人々が自分の人生観と宗教を結びつけて生きているからです。

宗教に裏付けられた人生観とはどのようなものか。そんなことを考える上でもチャペルアワーでのメッセージは有益です。もちろん、チャペルだからといってキリスト教信仰を絶対のものとして押し付けることはありません。一つの価値観と向き合い内的な対話をすることによって、自分の生き方を確立していく。そのような機会としてチャペルアワーを活用してください。

また、大学における宗教活動はチャペルアワーだけでなく、大学宗教部、学院宗教センターが協力してさまざまなプログラムが提供されています。読書会や聖書の学び、オルガン講座・音楽会・映画上映会やチャペルライブ、ワークキャンプなどのボランティア活動や「平和を考える旅」、キリスト教週間やクリスマス関連行事、文化的な催しとしては宣教師によるピース・カフェや料理教室・着物の着付けと抹茶を楽しむ会、さらにはアリーナを利用してのバスケットボールなど、年間を通じて数多く用意されています。これらの行事の中には企画・実施を皆さんと共に行なうものもいくつかあり、計画から積極的に参加していただくことによって新たな世界が開かれてゆくことでしょう。

宗教部事務室は横浜キャンパス、白金キャンパス両校地に置かれています。どうぞ気軽に立ち寄ってください。いろいろな情報が得られるだけでなく、皆さんのアイデアも活用させていただきます。そこから新しい活動が始まっていきます。スタッフ一同、どなたでも来て下さるのを楽しみにお待ちしております。

キリスト教活動案内

【宗教部】

宗教部は、明治学院大学のキリスト教活動全般を担当している大学の組織です。白金校舎は、チャペルの向かいの記念館という建物の1階に、横浜校舎は、チャペル脇の建物の中に事務室があります。事務室にいらっしゃるのはいつでも歓迎いたしますし、事務室の隣りには、それぞれ学生のキリスト教活動に使える集会室があります。

【宗教センター】

本学には学院全体のキリスト教活動にかかわる部門として、「明治学院宗教センター」が置かれています。中学校、白金高等学校、東村山高等学校、大学それぞれの宗教活動について連絡、協力する組織として1998年に発足しました。

【学院牧師】

明治学院ではキリスト教主義教育推進のため、またキリスト教諸活動を活性化するため1996年度より「学院牧師」の職を置くことにしました。学院牧師は他のキリスト教主義大学ではチャプレンとも呼ばれ、その働きは「本学院の勤務員、学生、生徒、卒業生及びその家族よりの求めに応じ、キリスト教による信仰指導」を行うと規定されていて、学院のキリスト教活動を行うと共に、学院関係者の信仰的、宗教的な相談を受けることも働きのひとつとしています。

また、横浜キャンパスのチャペルでは毎週日曜日、明治学院教会が礼拝を行っています。これは平日のチャペルアワーとはまた別の、地域教会としての礼拝です。学院牧師はこの明治学院教会にも責任を担っており、日曜日は教会の牧師として活動しています。学院教会には地域の方たちが集ってくるほか、本学の学生、卒業生も参加しており、子どもからお年寄りまで、礼拝と交わりを共にしています。

【大学礼拝 チャペルアワー】

本学では授業のある毎日（但し土曜日を除く）、チャペルで礼拝（チャペルアワー）を行っています。オルガンの前奏を聴き、讃美歌を歌い、聖書

に基づくメッセージがあります。メッセージは、本学の教職員、近隣の教会牧師、オルガニスト、学生など、さまざまな分野の方々が担当します。人生の根源的なテーマについて共に考えたり、今社会で起きている問題などを取り上げたりしますので、キリスト教的背景の有無に関係なく、広く皆さんの出席を歓迎します。聖書と讃美歌はチャペルに用意してあります。

【白金チャペル】 12:35～13:00（月・火・木・金）

【白金チャペル/夕礼拝】 17:30～18:00（水曜のみ）

【横浜チャペル】 12:40～13:00（月曜から金曜まで）

【特別礼拝】

特別礼拝は、イースターとクリスマス을祝して行われます。

イースターは、キリストの復活を覚える日として、キリスト教会では盛大に祝われています。本学では新入生の歓迎を兼ねたイースター特別礼拝を行います。

クリスマスは、明治学院のキリスト教活動では最大の行事で、多数の学生が出席しています。音楽系サークルも出演協力します。

新入生歓迎イースター特別礼拝

【白金チャペル】 4月16日（水） 17:30～18:00

【横浜チャペル】 4月17日（木） 12:40～13:30

クリスマス特別礼拝

【白金チャペル】 12月17日（水） 17:30～19:15

【横浜チャペル】 12月16日（火） 12:40～13:30

12月18日（木） 18:30～20:00

【キリスト教週間】

特定の期間をキリスト教週間として、キリスト教行事を実施します。福祉事業、医療活動、教育事業、政治活動など社会の幅広い分野に働く方の講演や、パイプオルガンやフルート演奏などの音楽会、話題作となった映画の上映会や写真展などを行っています。

2003年度のキリスト教週間は、横浜校舎が5月26日（月）～5月31日（土）、白金校舎は10月20日（月）～24日（金）の予定です。行事の詳細については白金通信や学内の掲示、週報、ホームページ等で確認してください。

【読書会】

読書会は誰でも自由に入ることができる講座です。授業のある期間に設定されていますので、時間の都合のつく方は参加してください。

「同と異、正と異」

講師：司馬純詩 国際学部教授

読む本：金城一紀『GO』講談社、1,400円

日時：4月16日 スタート

毎週水曜日 2限 10:55~12:25

場所：横浜宗教部集会室（横浜校舎 チャペル横の建物）

本は今年のベストセラー『GO』から読み始めましょう。窪塚洋介、柴崎コウ、大竹しのぶ、山崎努のキャストで映画化されたのを知っている人も多いでしょう。小説の主人公は在日韓国人です。昔の「在日文学」は、一般にはわかりにくい心の隅の葛藤をもったいびって描き、マニアックな偏執狂に愛されていました。今は在日が普通の恋愛小説の舞台背景となるのです。

でも、そんな恋愛小説のなかにも「同と異」、「正と異」の対比がある。異の反対は「同」と「正」。(えっ?) 同と正ってどうつながるのだろうか。本はゆっくり読み、ころあいを見てビデオやDVDで映画(GOでなくても良い)を見ようと思います。

4月16日は何も用意しなくてもいいから来てください。

「読聴会」

講師：久山 道彦 文学部教授

読む本：『失われた時を求めて』

日時：5月14日 スタート

毎月第2、4水曜日 7限終了後 21:20~22:20

場所：白金キャンパスキリスト教研究所（本館9階北ウイング）

「読書会」というのは、何か不思議な言葉です。何故、皆で集まって本を読むのでしょうか。自分一人で「読書」すればそれで済むとも思えるのに、いったい何故、わざわざ「会」を開いて偕に本を読むのでしょうか。二週間に一度、授業後のひととき、同じ本を読み、友の想うことを聴き語らう場を持つと考へました。夜の授業が終わって、9時20分から小一時間ほど、飲み物でも持ち寄って、お菓子でもつまみながら、友の言葉の中に、その表情の中に、一人で読む時には得

られない「宝」を発見したいと思います。始まって11年目を迎えますが、毎年、新入生から卒業生まで色々なメンバーが集う、気楽でささやかな会です。でも、本を媒介として「自前の頭」を創りながら、柔軟にして強固な志を持って、私達を取り巻く現実を、そしてなによりも自分自身を深く探求していきましょう。

今年度は、「『失われた時を求めて』を読破しようかな」と題して、マルセル・ブルーストの「超」長編小説をなんとか一緒に読破したく思っています。文庫版になっている井上究一郎訳を使う予定ですが、新しい鈴木道彦訳でももちろん結構です。名作の誉れ高い作品とはいえ、一人ではなかなか読破できないものかもしれません。時々または偶然の飛び入り参加者も大歓迎です。無理をせず、大学生活の緊張からリラックスするつもりでどうぞ。

QUICK BIBLE

講師：ODANI, Sean 講師（英語）

日時：5月12日、5月19日 月曜日 16:45~17:45

場所：横浜宗教部集会室（横浜校舎 チャペル横の建物）

This Bible study will take a look at the entire Bible quickly. We will look at a basic summary of each book. Some expressions in English Literature have their roots in the books of the English Bible. We will take a look at some of these expressions. On the first day, May 12, we will study the Old Testament. On the second day, May 19, we will study the New Testament.

聖書を読む

講師：大塩 光 蒲田新生教会牧師（本学卒業生）

日時：4月25日 スタート

毎週金曜日 14:45~15:45

場所：白金キャンパス 記念館1階 宗教部集会室

とにかく、まず聖書というものを読んでみましょう。知識優先ではなく「聖書本文」そのものを皆で味わい、率直に感じたことを語り合い、分かちあえれば幸いです。題材としてはマタイによる福音書の「イエスの山上の説教」を取り上げてみたいと考えています。イエス・キリストが一体何を語っているのか、それぞれで思ったことを出し合う機会としましょう。

心で味わう聖書

講師：深谷 美枝 社会学部助教授

日時：4月15日 スタート

第1・第3火曜日 16:00～18:00

場所：白金キャンパス ヘボン館10階深谷研究室

2002年度は、キリスト教とは縁もゆかりもない四年生と半年間聖書を読み、辛い時や落ち込んだ時に心を支えられたり、生き方を鋭く示されたりという経験を分かち合ってきました。クリスチャンになる気もないけれど、ちょっと心の支えが欲しい、キリスト教の学校に来たついでに聖書でもというあなた、お待ちしております。

【Peace Café】

水曜日にだけ開店する、とっておきのカフェです。手作りのお菓子を食べながらゲームをしたり、文化や習慣などいろいろなことについて話し合ったりしています。一人で参加してもすぐに打ち解けられるアットホームなプログラムです。試しに一度覗いてみて下さい。

<白金校舎>：毎週 水曜日 12時30分～午後4時

<横浜校舎>：第2、第4水曜日 午後2時～4時30分

白金校舎では5月7日から、横浜校舎では4月23日から開店。

【じんぶん倶楽部-沖縄ピースカフェ】

沖縄の文化・歴史・政治などについて学んでいきます。8月下旬に沖縄へ平和学習で訪問する予定です。沖縄で10倍楽しく過ごす方法なども話し合います。気軽に参加してください。

講師：金井創 学院牧師 大塩光 蒲田新生教会牧師（本学卒業生）

<白金校舎>

日時：毎月第1、第3金曜日 17:00～18:15

場所：白金キャンパス記念館1階 宗教部集会室

<横浜校舎>

日時：毎月第2、第4金曜日 17:00～18:30

場所：横浜宗教部集会室

白金校舎では5月2日から、横浜校舎では4月25日から開店。

「沖縄から平和を考える旅」に関心のある方は是非出席してください。

【手話講座】

この講座は、聴覚にハンディキャップのある人たちとのコミュニケーションツールの一つとして、手話を共に学び合おうという目的で行われるものです。そのような訳で、講座の“講師”も手話のできる学生が務める試みも取り入れようとしています。

そこで、この運営に協力してくれる学生を広く募集しています。手話ができる、できないは不問です。みんなで作り上げていこうという気持ちを持ってくださるかが、肝心なところです。

関心のある方は、横浜宗教部事務室まで連絡をください。

【オルガン講座】

両校舎のチャペルにはパイプオルガンがあり、毎日の礼拝や行事で演奏されていますが、聞くばかりでなく、弾いてみてパイプオルガンのすべてを体験しよう、という講座です。横浜・白金校舎それぞれのオルガニストが、演奏のかたわらレッスンを行っています。パイプオルガンへの興味は皆さままで、内側にもぐりこんで熱心に構造を調べる人、憧れのトッカータとフーガをめざして練習に励む人などいろいろです。礼拝で演奏する機会もあります。授業と異なり、一人一人の事情に合わせてカリキュラムが組めるので、皆それぞれ楽しんだり、たまには苦しんだりしながらパイプオルガンとつきあっているという、キリスト教主義学校ならではのプログラムです。横浜校舎ではリードオルガン、パイプオルガンと他の楽器等とのアンサンブルの講座もあります。白金・横浜校舎それぞれ以下の方法で受講者を募ります。

オルガン講座2003年度受講生募集要領

原則として鍵盤楽器経験者を対象とします。

<横浜校舎の場合>

履修登録4月18日(金)までに、所定の申込み用紙に記入し、宗教部に提出、オルガニストと個別に面接・相談してください。希望者多数の場合は、オーディションを行います。

<白金校舎の場合>

4月18日(金)までに、所定の申し込み用紙に記入し、宗教部事務室に提出して下さい。オーディションと面接を行います。

4月22日(火) 23日(水) 24日(木)いずれも14:00~16:00の間で、都合のよい日時にチャペルに直接おいでください。
課題曲は2曲、讃美歌312番とJ.S.バッハ・インベンション第4番二短調です。楽譜は宗教部に用意しています。

【学生宗教活動懇談会】

大学の宗教行事を積極的に支援している学生サークルがあります。新入生歓迎会、明治学院音楽祭、クリスマスツリー点灯式、クリスマス礼拝などの行事には宗教活動協力学生団体所属のサークルが出演し、イベントを盛り上げています。2002年度現在の所属サークルは以下の通りです。

グリークラブ	管弦楽団
吹奏楽部	白金ベルハーモニーリンガーズ
チャペルクワイア	クラシックギター研究会
ヘボン聖書研究会	アナウンス研究会
舞台技術研究会	国際クリスチャン同好会
グリーンリーヴス	JAZZ研究会
L.M.S(軽音楽サークル)	ゴスペルクワイア
人形劇団ZOO	

これらの学生団体のリーダーと宗教部とが1年に1~2度会合し、行事計画やサークル活動相談などを行っています。

【ペンテコステの集い】

ペンテコステとは、イースター、クリスマスにならぶキリスト教会の三大祝祭のひとつです。これは白金キャンパス周辺にある日本キリスト教団の諸教会と共催で行なわれる集いです。近隣教会と学院が良い協力関係で結ばれるよう30年にわたって行われてきました。今年は第一部・礼拝、第二部・音楽の集いとして計画しており、特に第二部では諸教会の聖歌隊、あるいはバンドなどの出演を予定しています。学生のサークル等の参加も歓迎しますので、興味のある方はお問い合わせください。

今年は、6月8日(日)に行います。連絡は、白金宗教部事務室まで。

【演奏会】

現在は主に横浜チャペルで年に2~3回、パイプオルガン・合唱をはじめいろいろなジャンルのコンサートを行っています。宗教音楽というと堅苦しいイメージですが、音楽はもともと宗教と深い関わりがあるものでした。社会背景、作曲者の生涯についての説明など、演奏者のトークもまじえて、学外からのお客様もこのシリーズを楽しみに足を運んでくださいます。演奏会の詳細は学内に掲示してお知らせします。

【明治学院大学音楽祭】

毎年、白金祭の期間に音楽系サークルの大半が一堂に会して日頃の成果を発表するのが、この音楽祭です。

普段のチャペルでは宗教音楽が主に演奏されますが、チャペルは決してクリスチャンだけの特別な場所ではなく、誰でもいつでも気軽に入れます。あらゆるジャンルの音楽の祭典に、皆さんも聴衆、あるいはプレイヤーのひとりとして参加してください。

例年の参加サークルは、管弦楽団・吹奏楽部・グリークラブ・グリーンリーヴス・クラシックギター研究会・ベルハーモニーリンガーズ・マンドリンクラブ等です。

【Peace Hands - アンネのバラ計画】

2003年4月、白金・横浜の各大学キャンパス、白金・東村山の各高校キャンパスに「アンネのバラ」が植えられます。これは、ナチスの強制収容所で15歳の命を終えたアンネ・フランクを偲んで作られた新種のバラで、日本には1972年にもたらされました。この度、ホロコースト記念館(広島県)より苗木を寄贈され、学生・生徒の手で育てていきます。バラを通して平和と命の大切さを学びましょう。

【宗教部図書】

横浜宗教部には学生へ貸出用図書があります。キリスト教関係の図書で内村鑑三や八木重吉の著書から、社会や文化についての評論まで多岐にわたる分野の図書を用意していますので気軽に借りに来てください。

【ワークキャンプ】

国内・海外のワークキャンプを計画しています。

<アジア学院ワークキャンプ>

国内は、栃木県の西那須野にある**アジア学院**にて、3泊4日の予定で行うプログラムです。アジア学院は、キリスト教を基にアジア・アフリカ諸国から農業、牧畜についての研修をするための留学生を受け入れている学校ですが、日本の学生たちの農業・畜産の体験学習も受け入れています。2003年度もワークキャンプを実施します。家畜の世話や畑での作業、施設の修理など、日頃経験できないような作業ばかりですが、農作業初体験の方でも大丈夫です。働いて汗を流すことの気持ち良さ、空腹そして食事のありがたさなど、労働に限らないたくさんの経験が待っています。

2002年度は、明治学院東村山中学校、東村山高校、白金高校、明治学院大学そして桜美林大学の学生と共にキャンプをしましたが、学年を超えた仲間を見つけることができたいい機会だったと思います。

一日は先ず、礼拝から始まります。その後、鶏や牛や豚にえさをあげたりなど家畜の世話ががあります。作業の中心は畑での農作業です。去年は、温室作りやペンキ塗りもありました。その他、食事作りやアジア学院の設備の手入れなどがあります。時には収穫物の加工など多岐にわたります。研修生（留学生）と一緒に農作業をしたり、交流の時も持ちます。このキャンプを通じて、いろいろな人と交わり、友人を作りましょう。そして、自分の新たな可能性を開きましょう。

今年のアジア学院の日程は、8月6日（水）～9日（土）の予定です。詳細は白金宗教部事務室に問い合わせして下さい。

<海外ワークキャンプ>

今年度の**海外ワークキャンプ**は、昨年度と同様に**フィリピン**に行きます。キリスト教主義のNGOである**ハビタット・フォー・ヒューマニティ**との協力で、10日間程度の期間で住宅建設をするプログラムを計画しています。一戸の家を完成させて、住人となる人に鍵を渡して完了します。

4月から5月にかけて、ワークキャンプの説明会を白金・横浜両キャンパスで行います。その際に参加希望者の登録をし、6月から8月にかけて10回前後の事前研修会（合宿もします）を開催します。そこでは、現地での活

動内容、安全や健康管理の方法、ハビタット・フォー・ヒューマニティについての知識、フィリピンの社会状況などの学習を含んだリーダーシップ研修を受けることとなります。また、1つのワークキャンプグループとして役割分担も決め、準備を進め、当日を迎えます。

現地では、朝から夕方まで建設現場での作業が続き、夜や週末は見学や娯楽で楽しみます。最終日には、献堂式の後、さよならパーティで幕となります。宿泊は、ホテルなどの宿泊施設で、ホームステイも考えています。

2002年度の参加費は、11日間で12万円でした（交通費、宿泊費、食費、保険および建設費用を含む）。その他に、予防接種の費用が2 - 3万円掛かっています。

今年の海外ワークキャンプの日程は9月5日（金）～17日（水）の予定です。詳しくは白金事務室に問い合わせして下さい。

【平和を考える旅】

平和を考えるスタディーツアーです。2003度も前年度と同様、8月下旬に沖縄県を訪ね、戦跡や文化遺産などを見てまわる予定です。旅の参加条件としては、事前学習会になるべく出席し、沖縄の文化や歴史などに親しむことです。春学期には沖縄に関する学習会を開きますので、参加希望者はぜひ出席して下さい。

これまでの戦跡巡りの学習と併せて沖縄に残されている手つかずの自然を満喫するプログラムも立てました。また8日間の旅のうち一日は自由行動として、少人数で自分達の関心に合わせて沖縄を楽しめます。

2003年度は、8月25日（月）～9月1日（月）に行います。

【クリスマス実行委員会】

学生が中心になって「クリスマス関連行事」を実施します。学内のクリスマス装飾の企画・作製・飾りつけや学生参加による「クリスマス礼拝プログラム」企画と運営を行います。明治学院大学らしいクリスマスを一緒に演出し、お祝いする機会となります。

【クリスマスツリー点灯式】

クリスマスを迎える約一ヶ月前、白金、横浜両キャンパスで電飾されたクリスマスツリーの点灯式が行われます。白金では、高校と大学が協力し合って計画、実施しています。インブリー館内のツリー、チャペル内のツリー、そしてチャペル横のツリーにそれぞれ点灯し、毎日夜10時まであかりを灯されたツリーがクリスマスシーズンのキャンパスを彩ります。横浜キャンパスの点灯式は、学生サークルのL.M.S(軽音楽サークル)や舞台技術研究会が計画から自主的に始め、学生主体の行事として盛大に行われます。また近隣の方々や保育園の子どもたちも参加してくれるようになり、大学と地域の交流の場にもなっています。

【ページェント】

ページェントは、イエス・キリストの降誕物語の劇です。演じられるページェントは、クリスマスキャロルのメロディーにあわせて表現される無言劇で、しかも野外で演じられるというところに特徴があります。参加にあたってクリスチャンかどうかは不問です。役者だけでなく、裏方さんも(照明・小道具など)大歓迎!横浜事務室までお問い合わせください。

【市民クリスマス】

横浜キャンパスのチャペルで行なわれる、地域住民を対象としたクリスマスの集いです。特に子ども向けのプログラムによって進められ、このために例年多くの学生が参加、出演しています。

【クリスマスコンサート】

クリスマスを祝したコンサートが両キャンパスで行われます。白金チャペルでは、イギリス大使館クワイヤのチャリティコンサートが、恒例になっています。

【クリスマス燭火礼拝】

白金チャペルの12月17日(水)と横浜チャペルの12月18日(木)のクリスマス特別礼拝は、燭火(キャンドルライト)礼拝です。白金チャペルの礼拝後には、キャロル(クリスマス讃美歌)を歌いながら歩くキャロリングも行います。蠟燭の火だけが灯されたチャペルで、音楽と瞑想とメッセージの荘厳な礼拝が行われます。

【クリスマス音楽礼拝】

毎年12月23日に、明治学院の卒業生・在校生・教職員が集まって厳かにクリスマスを祝って、白金チャペルで行われます。

クリスマスの名曲はたくさんありますが、その中でもキリストの誕生物語を音楽にしたバロックの宗教音楽を中心に、音楽をちりばめたこの燭火礼拝は、巷のクリスマスとは違う心安らかなひとときを与えてくれます。家族で参加も歓迎です。

【宗教部・宗教センターの連絡先】

宗部部のホームページでは、毎日のチャペルアワーの情報ははじめ、主催プログラム・行事の案内や学生の感想などを中心に構成しています。

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~shukyo/>

白金事務室	記念館1階
〒108-8636	東京都港区白金台1-2-37
電話	03-5421-5218 F A X 03-5421-5459
電子メール	shukyos@mguad.meijigakuin.ac.jp

学院牧師室	白金校舎インブリー館2階	電話	03-5421-5228
オルガニスト	白金校舎記念館1階	電話	03-5421-5227

横浜事務室	教会堂脇建物1階
〒244-8539	横浜市戸塚区上倉田町1518
電話	045-863-2016 F A X 045-863-2017
電子メール	shukyoy@mguad.meijigakuin.ac.jp

宗教部の活動に参加して

【学生の声】

オルガン講座を受講して

国際学部4年 宮内 智子

私は、卒業を目前にした今、横浜のチャペルで4年間パイプオルガンを習うことができ、本当に良かったと感じています。私は、明治学院大学に入学するまで、キリスト教とは全く関わりのない生活をしてきました。そんな私と、チャペルを結び付けてくれたのが、パイプオルガンでした。

小さい頃からピアノを習っていた私は、音楽の大好きな子供で、家の近くにあった音楽ホールには何度も連れて行ってもらっていました。私の、パイプオルガンとの最初の出会いはその頃でした。その音楽ホールの壁には、銀色に光る何本ものパイプが貼り付けてありました。それがパイプオルガンという、私が3、4才の頃から慣れ親しんでいたオルガンの仲間である、ということを知った私は、ぜひその音を聞いてみたいと思うようになりました。そして連れて行ってもらったコンサートで、初めてその荘厳な音を聴いた時、私はものすごく感動し、心臓がドキドキしていました。それが、「いつかあの楽器を弾いてみたい」という強い憧れの気持ちが芽生えたきっかけでした。その時から、パイプオルガンの大ファンになった私でしたが、とても大きな楽器であるパイプオルガンが置いてあるような場所はなかなかなく、長い間「弾きたい」という願いが叶うことはありませんでした。

それから何年か経ち、私は進路選択のため、ここ明治学院大学にやってきました。そこで見つけたのがオルガン講座の張り紙だったのです。「これだ!」と思いました。そして私は明治学院大学への入学を決意したのです。

待ちに待ったオルガン講座の初日、初めて自分で、憧れのパイプオルガンを弾いた時、その音がチャペル全体に響き渡っていったのが、とても嬉しく、心地よい感触が湧き上がってきたのを覚えています。

その日から4年近くが経とうとしています。いろんな楽曲を通して、た

くさんの喜びや感動を与えてくれたパイプオルガンに対する、私の憧れの気持ちは、今この講座を受ける前よりもずっと大きなものになっています。また、キリスト教の教えをほとんど知らなかった私ですが、自分の大好きなパイプオルガンを弾くことを通して、少しでもキリスト教に触れることができ、とてもよい経験ができたと感じています。

最後に、4年間私を指導してくださり、このような貴重な体験をさせてくださった山本由香子先生、本当にありがとうございました。

手話講座をふりかえって

社会福祉学科2年 山本 弥生

皆さんは宗教部プログラムの一つである「手話講座」が毎週木曜の2限に横浜チャペルで行われていたのをご存知ですか？“手話に興味のある学生が集まって一緒に手話を学んで行く”というテーマのもと、一年間みんなが活動を行ってきました。この講座の大きな特徴は、参加する学生が主体となり、毎回教えたり教わったりしながら進んでいくことです。ですから、この講座に講師の先生はいません。では、ここから簡単に春学期・秋学期の活動内容を紹介していきたいと思います。

春学期は自己紹介や挨拶、簡単な文章や質問文、指文字等について学びました。毎回各グループに分かれて練習を行い、その後学んだ手話を使ってみんなの前で練習の成果を発表しました。発表方法や内容は自由で、グループごとに個性が出ていました。教材本として使っていた「NHK みんなの手話(上・下巻)」のテレビ放送を録画したものをみんなで見たりしました。また、宗教部プログラムの一つであるという事もあり、讚美歌の手話歌を練習したりもしました。春学期の最後の手話講座では、みんなでお菓子をもち寄って打ち上げを行いました。

次に秋学期の活動についてですが、秋学期も春学期と同様に練習 発表というやり方で手話を学びました。加えて、秋学期は「君の手がささやいている」というビデオ(主人公は聾の女性)を見ました。ただ普通にビデオを見ているだけではなく、テレビの音を消して画面の中で使われている手話だけで内容を読み取る、という事に挑戦したりもしました。ちなみに、これはそのとき手話講座に参加していた学生(聾者)から提案された意見を取り入れて行ったものです。12月にはクリスマス会と称し、またまた各自でお菓子をもち寄り、手話を使ったゲームをしたり、お喋り(出来る出来ないに関わらずもちろん手話を使って)をしたりしました。そして1月9日に2002年度手話講座は幕を閉じました。

私自身、手話講座に参加して最も印象に残っている事は、春学期にゲストスピーカーとして講演に来てくださった神奈川県聴覚障害者総合福祉協会理事長の黒崎さん(自身もまた聴覚障害を持っている)のことばです。みなさんは黒崎さんのこの話を聞いて何を思うのでしょうか。

みなさんは聾者が障害者であるという。けれども、私は普段の日常生活の中では障害を感じません。一人で行きたい場所にいきますし、買い物だって出来ます。では、どのような時に障害を感じるか...それは健常者と喋る時、手話が分からない人と喋る時です。多くの場合、人は喋る時に言葉を使うからです。では、もしも社会の中で手話を使える人の方が多く存在し、手話を使えない人の方が少ししか存在しなかったら?...もしそうなったなら、聾者(手話を使える人)が健常者で手話を使えない人達の方が「障害者」ということになるでしょう。

ページェント実行委員会2002 活動報告

国際学科3年 中山 詩子

ページェント実行委員会は一昨年、有志を中心に発足しました。活動目的は、「キリスト教の学校らしく、クリスマスにはページェントをしよう」というものです。このページェントは無声劇で、讃美歌に合わせて演じるものです。

2002年度は、春学期に役者、讃美歌歌手を募集し、役者の方のみ、なんとか人数をそろえることができました。秋学期に本格的な活動を始め、11月、12月は週に一回程度、昼休みに集まり練習を行いました。また、舞台設定や劇の上演方法なども話し合いました。讃美歌については結局歌手がいないために、役者で歌うことにしました。そして聖書の話を知らないメンバーのために、クリスマスの話をしてどんな劇なのか、知ってもらいました。当日は早めに集まりリハーサルをした後、本番に臨みました。当日になって宗教部の方が讃美歌を歌っていただけることになり、大変にぎやかなものとなりました。たくさんの方に見ていただくとうとチャペルの前で上演しましたが、今回は赤ちゃんを連れての方が見に来てくださり、とても嬉しく思いました。

寒い中、見てくださった方々、どうもありがとうございました。

ACUCA STUDENT CAMP

英文学科4年 樋口 咲子

“ARE YOU HAPPY?!” そんなスタッフの呼びかけに全員が勢いよく“YES!!”と応えて、ACUCA主催の学生キャンプが幕を開けた。12月の香港、100万ドルの夜景に胸躍らせながら到着した私を待っていたのは、激しくタイトなスケジュールと、元気いっぱい香港の学生だった。素晴らしい出会いを予感させる合宿の始まりである。

ACUCA(アクーカ)とは、アジアキリスト教主義大学同盟(Association of Christian Universities and Colleges in Asia)の略称で、教授会議や学生キャンプを行いながら、よりよい大学をつくることを目的に活動している組織である。今回私が参加した香港でのキャンプには、フィリピン、タイ、マレーシア、韓国、台湾、香港、日本の7つの国から学生が集まり、今年のテーマである『大学における学生の役割』について話し合った。初日に簡単な自己紹介とオリエンテーションを済ませ、翌日から本格的なプログラムが始まった。

2日目、ホスト大学である嶺南大学の学長の挨拶が終わると、学生自治に関する講義があり、その後で各国の学生による国別のプレゼンテーションが行われた。最初は香港の学生、続いてインドネシアの学生が、それぞれ自治会のできるまでと、現在の活動について発表した。次に話した台湾の学生の発表は、実に具体的で参加者全員の共感を呼んだ。大学内にある学生寮の改善を求め、自治会を中心に署名活動をしているというのである。キャンパス内に住んだことのない大学スタッフに対し、いかに学生の声を伝えるか、自治会が大きな役割を果たす一例を報告した。

対照的に、学祭での盛り上がりは生徒の力によるものだ、と言ったのはフィリピンの生徒だった。ミスコンのパンフレットを皆に配りながら、自分達の手で大成功を収めた一大イベントも、普段の学生自治を充実させているからだと言っていた。お国柄からか、途中ダンスをしてみせるシーンもあり、陽気で楽しいプレゼンだった。

このように各国の生徒が自治会の意義を述べるなか、いよいよ日本の番になった。今回で参加は2度目という関西学院大学の4年生が代表をつと

め、戦後の学生運動とその弾圧、そして現在の学生の無関心さについて述べた。「僕の大学には自治会がないんです」。その言葉に、一瞬会場がどよめいた。「自治会なしでどうやって学生の声を上届けられるのか？」皆口々に質問した。確かに、学生からの要望や要求を通して学校を変えていくためには、そうした声を集めて行動に移す機関が必要になってくる。しかし、実際現在日本の大学生の、一体何割が自らの大学、あるいは日本の学校制度にそうした関心をもっているというのだろう。効率的に単位を得て卒業することばかりに頭を働かせている学生がいることなど、彼らには想像がつかなかったのか、何度説明しても納得のいく顔を見せてはくれなかった。

こうして、初日から熱い討論を繰り広げた私たちの合宿は、そのまま3日目のグループディスカッションにも及び、同じ学生でありながら環境の違いでこうも考え方が変わってくるのだということを、参加者全員が認識させられる結果となった。

この3泊4日のキャンプを振り返りまず思うことは、私たち日本の学生は皆、自分が所属している大学の一員であるという意識をしっかりともち必要があるということである。学校という組織に属する一人としての役割、すなわち勉強する義務と主張する権利について、今一度考えてみなければならぬ。それが、よりよく快適な、意義ある大学生活を送るための第一歩であり、また、そうした理想的な学校を創る上で必要不可欠なのである。まずは身近なところから、この明治学院大学のもつ良さと改善点を、皆で話し合ってみようではないか。

アジア学院ワークキャンプに参加して

法律学科3年 唐澤 俊雄

自分がこのアジア学院のワークキャンプに参加した理由は、普段大都会では体験できない農作業について興味があり、面白そうだったためこのキャンプに参加しました。

実際アジア学院に到着し、豚舎で穴掘りのワークを体験するなり、今まで自分が思っていた農作業は「面白そう」という考えは消え、炎天下と暑さの中での農作業はとても過酷だと思いました。しかし、しんどいと思いつながりワークをするうちに、作業をやり終えた達成感と充実感はとても気持ちよかったです。また自分は豚舎の基礎工事を中心にワークをしたのですが、そのワークの時間帯ごとにみんなで穴掘りを完成させることや石を溝に全部積める等の目標をきめ、それをやり終えたときに得たワークに対しての達成感は忘れることはできません。またワークでの学生や職員たちとの交流により得た協調性はとてもよい経験になりました。

最後にこのアジア学院での3日間の農作業の体験により、農作業の大変さを理解できたと共に、ワークを通じての共同作業で連帯感などいろいろな事を学ぶことが出来ました。アジア学院での3日間は自分にとってとても貴重な経験になりました。また機会があれば行きたいです。

気づいていなかったことに目を向ける大切さ

フィリピン・ワークキャンプに参加して

英文学科1年 鈴木 まりえ

初めに言います。私がフィリピンへ行って気づかされたこと、それは「宗教」です。おそらく皆さんもそうでしょうが、外国へ行くとなると日本においては気づかないことに出会えるのではないかという期待と、そしてその新しく出会ったものは自分自身にどんな影響をもたらしてくれるのか、という興奮に満ち溢れるのではないのでしょうか？私はフィリピンへ旅立つ前、少し不安もありましたが、そんな期待と興奮に胸を躍らせていました。

私がフィリピンへ旅立つ前の私と宗教との接点は、入学した大学が偶然にもキリスト教主義の大学だったことと、キリスト教の基礎という授業を受けているということだけでした。私の日常生活の中では全くといっていいほど意識しなかった、いや意識しようとしなかった宗教に私はフィリピンでどのように出会ったのか...？ということをお話したいと思います。

観光地としても日本で有名なセブ島からフェリーで1時間半離れた所にある島、ボホール島。私達、明治学院大学のチームが家を建てるお手伝いをした所です。そのボホール島に到着した初日、私達は、実際に働く場所へ訪れたり、現地の学校を見学したりしました。そして最後に島最大のスーパーへ買い物に行った時のこと、私は思いもよらない言葉を聞くことになりました。スーパーには、私達が滞在している間に色々な面倒を見てくれる現地のスタッフも同行してくれていました。私は、そのうちのスタッフの1人ジュリエットという20歳前半の女性と一緒にスーパーを見てまわっていました。家族は何人？趣味は何？専門学科は？など自己紹介も兼ねての会話をしていました。そんな会話の中でジュリエットが「What's your religion?」、「あなたの宗教は何？」と尋ねてきました。私は仏教と答えていいのかなあ？でも私は別に信仰を持っているわけでもないし...と戸惑いました。結局私は、信仰心をもっていないので「No religion 無宗教です」と答えました。ジュリエットの反応はというと、初めは驚いたような顔をしていましたが、次第にいぶかしい顔になっていき、私に「Not good」と言いました。なぜ「Not good」と言われるのだろうか、疑問も湧

いてきましたし、思いもよらない返答だったのですが、特に返す言葉が見つからなかったのも、そこでこの会話は終わりました。

その時はこの「Not good」という短い言葉の中に宗教に対する価値観の違いがこんなにも含まれているとはもちろん気づきませんでした。「フィリピンの人は、非常に信仰心が強くて、日常生活の中に宗教は深く結びついている」。フィリピンに行く前にチームで開いた勉強会で、私はこのことを知りました。私は、前々からどうして宗教をもつのだろうか？という疑問がありました。悪質な宗教ばかり目立ってしまう日本の風潮などから、私の宗教に対するイメージは、はっきり言ってマイナスだったからです。

チームリーダーの鍛冶先生と夕食をとった時のこと、私は先生にその質問を聞いてみました。「どうして宗教を持つのですか？」と。先生は「それは日本以外の世界からみると、質問は逆方向だよ。多くの国では、どうして宗教をもたないのですか？と聞かれるよ」と言われました。世界を見渡してみれば、私のような無宗教の人の方が珍しいことや、宗教をもっている人から見れば、もっていない人は何を自分の信念として生きているのか、中身が空虚なのかと疑問に思われている、ということをお話したのはその時初めて知りました。もちろんはっきりとは言えませんが、おそらくこのようなことを思って、ジュリエットは私に「Not good」と言ったのではないかと気づきました。それは「Not good」とジュリエットに言われてから、2日たった時でした。

ここまでが私のフィリピンでのエピソードです。初めにお話ししたように、私がフィリピンへ行って気づかされたことが「宗教」だったとは思ってもよらなかったことだし、今こうして私が「宗教」をテーマに話しているなんて3ヶ月前、つまりフィリピンへ旅立つ前の私からは全く想像できなかったことです。ゼロとは言わないまでも、限りなくゼロに近く、遠い遠い存在に過ぎなかった「宗教」が、今では私の日常感覚で、10のうち2を占めるようになりました。このように私にとって「無」でしかなかったものが、私の中の一部分になっていくこと、環境が変わることで今まで無意識だった存在に目が向くようになること、私は今そのことをとても実感しています。

「日本においては、気づかないようなことに目を向けるようになることが、ワークキャンプの目的の一つです」。鍛冶先生が言われたことです。私は何度か海外へ観光旅行をしたことがあります。よく思い出しますが、日本

の「トヨタ」や「日産」などの大きな会社を海外で発見した時、私はなんだか嬉しくて親や友達に「日本の会社がたくさんあるねえ～」と言ってひどく感心したり、マクドナルドを発見したら「やっぱり海外にもあるんだあ～」などとなぜか知らないけれど感動したりしたことを覚えています。旅のお土産話を友達にする時も「マックすごいたくさんあったよ～」などと話していました。日本にあるものが外国にもあるという安心感からか、日本にいても気づくようなことばかりに目がむいていたような気がします。自分の中で「無」でしかなかったものが、自分の中の一部になり新しい価値観ができる。「気づかないようなことに目を向けていく」、このことがこんなに大切なことだとは思いませんでした。フィリピンに行ったことがきっかけで宗教という新しい価値観が自分の中で生まれ、そこから広がっていく。「気づいていなかったことに目を向ける」。全てはここから始まるのだと感じざるをえませんでした。

向き合ってわかること

フィリピン・ワークキャンプに参加して

国際学部 2年 塚本 友紀

私は、2002年9月10日から20日までの11日間、鍛冶先生、金井先生を含む20名の仲間達と一緒に、宗教部が主催するフィリピン・ワークキャンプのメンバーとして、そしてNGOハビタットフォーヒューマニティーの活動の一環として、フィリピンのボホール島に一軒の家を建ててきました。

今回チャペルで話をするということで、タイトルは何にしようかと悩みながら、現地で書いていた日記を読み返してみると、こんなことが書いてありました。「この11日間で何がどう変わるかわからないけれど、自分と素直に向き合うことをこれからのテーマにして、全てわかるはずはないけれど、だからこそ見られるものは全て見ておこうと思う。」

日本に帰ってきて、色々な人に「フィリピンとかボランティアについて詳しくなったんじゃない？」とよく言われますが、「全然わからないままだよ」というのが私の答えです。フィリピンに行って、たしかに知ったこともあったけど、このような経験をする前より今の方が、わからないことや、知らないことだらけであると実感しています。しかし、フィリピンに行って、たしかに見て感じたこと、考えたことは日本に持ち帰ってきたつもりです。石や砂利、セメントをみんなで運んだこと、一日に何個ものマンゴーを食べたこと、子供たちに引っ張られて村中を何もかも忘れて走り回ったこと、トラックに乗って歌をうたいながら帰ったこと、入院した仲間、みんなの日焼けした笑顔、他にも記憶に残っていることはたくさんあります。

私にとって、非日常であったアノ生活から日本の生活に戻り、今日でちょうど2ヶ月です。2ヶ月たって、やっと冷静に考えられる今思うことは、あのころ私が感じたことは全て「向き合う」という行為から湧いてきたということです。その「向き合う」という対象は様々でした。

まず、最初に向き合った相手は一緒に家を建てた仲間達です。出会ったばかりの頃は、チームみんなの個性や意志の強さに圧倒されてしまい、

私はうまく自分を出していないだとか、私の役割なんて無いのじゃないかと、どんどん落ち込んで自分を全否定した時もありました。日本でもこんなにてこずっているのに、フィリピンに行って私は何ができるのか、私には行く価値はないのじゃないかと、ずっと不安だらけでした。

フィリピンでは、仲間と色々な話をする時間がたくさんあったように思います。もちろん、バカ話もしたけれど、そのほとんどは、今感じている不安でしたし、自分自身についてのいろいろな真剣な話ばかりでした。観光で訪れたロボック川の船の上で語ったり、宿泊したホテルのカウンターで話をしたり、時には停電したホテルで懐中電灯片手に語り合ったこともあります。そんな中、メンバーの口から「でも、頼りすぎるのはいけないよね！」という言葉が出ました。思い返してみると、私はいつも仲間をあてにして、自分から一歩も踏み出すことができないでいました。だから、こんなに不安を感じてマイナス思考になっていたのです。この一言は、ずっと私が感じていた不安をスッと消えさせるほどの大きな力を持っていました。自分から動かないと何も変わらないし、今がそのチャンスなのではないかと気付き、行動に移せたのは仲間と向き合い普段できないような話ができただからだと思います。そして、彼らと一緒に働いて、家が形になったことで、みんなが一つになることの大切さ、それと同時に一人一人の大切さも実感しました。実際、私も一人では何もできません。でも、こうしてみんなの力を合わせれば、何かできるし、私もその一部として役に立ったのだと実感できたことは、家を作ったという事実、そして自分自身に対しての自信へとつながったと思います。

次に向き合ったのは、フィリピンでした。私たちが家を建てた村の人たちに会って間もない頃、驚いたことがあります。それは、同じ村に住んでいる人はみんな家族のように親密である、という点です。家の出入りがとても激しく、誰が家族で、誰が近所の人なのかわからないほどでした。それは小さな村だから、みんなが顔見知りというのも理由だと思いますが、日本のように家が常に家族だけのプライベートな空間ではないこと、それと同時に、誰でも歓迎するよ！という彼らの考え方や生活の仕方も理由の一つだと感じました。また、彼らの表現方法は本当にストレートで、好きという気持ちを体全体で表現し、楽しさを歌やダンスで相手に伝え、子供たちは遊びたい気持ちを、目をきらきらさせながら笑顔で私たちに伝えてくれました。

村での生活は、私にとって本当に幸せそのものだったように思います。日本に帰ってきて、私がアノ村で感じていた幸せって何だろう、どうしてあんなに幸せだったのだろうと考えることがあります。その答えはいくら考えてもなかなか出ず、それはきっと曖昧すぎて、うまく言葉になんかできないのではないかと思います。でも、今でも心に残っている人間の温かさ、それが今出せる精一杯の答えです。その幸せは、きっと経済的に豊かなこの日本に生まれた私の無いものねだりにすぎないでしょう。でも、目を見て話さなくとも、メールや電話で成り立ってしまう今の人間関係より、シンプルだけどストレートに生きることや、相手を知ろうと向き合い、目を見て気持ちを伝える彼らの生き方のほうが、ずっと人間らしいと思うし、私はこの大切さを忘れかけていました。そんな彼らと、たった何日間かではあったけれど、共に過ごし、働き、遊び、向き合ったことにより「私はたしかに、今生きている！」という今まで感じたことのない実感を得ることができたし、凄く漠然としているけれど、最後に必要とされるのは、こうした人間同士のあったかい関係なんじゃないかと思いました。

ここまで話をしてくて、突然こんなことを言うのはおかしいですが、私がフィリピンにいくぞ！と決めたときの理由は、成長したい、世界を見たい、ただ、それだけでした。今思うと、自分すら見えていないのに、世界なんて見えるはずがありません。向き合う相手を、世界という一番大きな存在から、私という一番小さな存在に戻してくれたフィリピンでの、ある出来事を話したいと思います。

それは、ボホール島最大の街タグビラランで買い物をした時のことです。帰るとき、4・5人の子供たちが私に近寄ってきて、買い物袋を引っ張るので、私はとっさに盗られると思い、その子たちを冷たくあしらったことがあります。後になってわかったのですが、ゲームをするために必要なシートがほしくて、見るからに言葉のわからなそうな私の袋を引っ張り、ほしい！という気持ちを伝えていただけなのです。それを知った私は自分の考えの愚かさを悔やみました。私のものを盗るな！というような冷たい態度や表情を見て、私から離れていった子供たちの顔やあの場の雰囲気は今でも忘れません。私には、フィリピンというと貧しい、だから物乞いか物取りとか多いだろう、という簡単な考えしかなかったということに気が付きました。

問題は世界の貧困や、フィリピンの経済状態より、何より自分の内面に

あると感じました。どうして、こんな考えしかもたずにフィリピンに来てしまったのだろうと、またまた自己嫌悪に陥ったのです。しかし日本での、自分を全否定してしまうそれとは違っていました。家を作るということや、そのめったにできないワークキャンプに参加しているということに、どこか自信のあった自分が見事に崩されゼロになり、そんな未熟な自分と向き合ったからこそ、次に進めたのです。つまり嫌いな自分も駄目な自分も含めて自分なんだと受け入れ、認めることができました。このことは、ただ単に、自分はダメだ！嫌いだ！と言っていただけの私にとって、かなりの大きな一歩だったように思います。

帰国後、会った友達に「強くなったし、生き生きしているね！」みたいなことを良く言われます。自分では、よくわからないけれど、それが本当ならば、きっと仲間やフィリピンの人たち、そして何より自分と本当に思いきり、これでもか！というくらい向き合い、自分を受け入れることができたからだと思います。向き合わないとは何も見えないし、何も感じないし、何もわかりません。当たり前といわれれば当たり前だけど、その当たり前なことを、私は忘れかけていました。メンバーそれぞれがお互いを支え合い、認めて向き合ったからこそ本当の仲間になれ、その結果が家であったし、お互いを知ろう、知りたいと向き合ったからこそ、言葉がうまく通じなくとも、フィリピンの人たちと分かり合えたのだと思います。きっと、あの11日間の記憶は悲しいけれど、どんどんと薄れていってしまうでしょう。でも、向き合って分かり合えた！という少し曖昧だけど、確かに感じた喜びや、何となく心に残っている人間のあったかさは一生忘れないと思います。

フィリピンに行って知った、向き合うことの大切さ、そしてこの活動は、私達の中では完結していません。私たちのこのような経験を自分たちの中だけで消化せず、こうして少しでも伝えて、色々な人に知ってもらうことが、まだまだ不足している家がアノ国に少しずつだけれど、確実に増えていく原動力になると信じています。私たちは、これからフィリピンに行き、家を建てるというこの活動を続けていくつもりです。そして、そのための団体・組織を明治学院大学に作りあげていく準備段階に入っています。今以上に学ぶことは、たくさんあるし、前に進んでいけばいくほど、わからないこと、考えるべきことはたくさん出てくるでしょう。そうした活動を通して、そして私がこれから生きていく中で、今まで見ているようで見て

いなかったものや、見ていても気にもとめていなかったものを見て、感じて、わかるために、とことんたくさんの人や、物と、そして自分とじっくり、ゆっくり向き合っていこうと考えています。

沖縄から平和を考える旅に参加して

社会福祉学科 2年 三浦 麻希子

私は今年の夏、生まれて初めて沖縄の地に降り立ちました。

沖縄から平和を考える旅の存在を知ったのは、春休み中に届いた白金通信の隅の方にコーヒーハウスのことが載っているのを見つけて行くようになったからです。

なぜコーヒーハウスに興味を持ったかと言うと、高校時代の日本史の先生が日本史の教科書を改訂する運動をなさっている一人で、太平洋戦争に限って言えば「日本がやられたこと以上に、日本がやったことを知りましょう。」という考えをお持ちの先生でした。そのため日本がアジア諸国にした残虐行為を海外の教科書から学んだり、沖縄地上戦のこと、日本軍が戦闘員・非戦闘員に関わらず行ったことについて学んだりしたので、沖縄にはかなりの興味がありました。もちろん戦争以外にも、NHKで放送されていた「ちゅらさん」を見て、沖縄の文化や風土、人々の温かさを感じ、一度行ってみたいと思っていました。そして同じ社会福祉学科の友達を二人誘って参加することになったのです。

沖縄の那覇空港に着いて最初に思ったことは「異国情緒あふれる土地だ！」でした。那覇空港から初日の宿泊先の新金一旅館に向かうバスの中で、ずっと道路案内を見ていたのですが「南風原」や「東風平」など読めない地名だらけで、日本ではないような錯覚に陥りました。そしてこの錯覚は色々な場面で一週間感じることになりました。

錯覚その 1 は、有刺鉄線の向こうには行けないという事実を知った時に感じました。日本国土のはずなのに、道路は続いているのに、鉄線で行き止まりにされたの向こう側には行けませんでした。なぜか？それはアメリカ軍の基地が広がっていたからです。また那覇空港に着陸する時もかなりの低空飛行をしており、それはアメリカに空域に引っかからないようにしているからだということを改めて実感しました。ここは日本なのか？アメリカなのか？

錯覚その 2 は、何色とは言えない海を目の当たりにした時に感じました。地元横浜の海の色は？と聞かれたら、私は「緑がかった黒色」と答えます。

工業排水で汚れた海は青くもないし、水とは思えない色をしています。ところが沖縄の海はと言うと、全く違った意味で何色とも言いがたい色をしていました。青でもない、エメラルドでもない、かと言って透明でもない色をしていました。見た人にしか分からない色かもしれません。あんな綺麗な色が見られるなんて本当に日本なのか？

錯覚その 3 は、市場に熱帯魚みたいな魚たちと、豚の頭が並んでいるのを見た時に感じました。自由行動の日に公設市場に行ってみると、そこでは鮮やかな体を光らせている魚と眠っているような豚の顔が出迎えてくれました。横浜で見る魚たちは銀や黒く光るのが精一杯で、沖縄の青や赤い魚たちにはかないません。横浜では考えられない色を見せてくれました。その横で、大小さまざまな大きさがある豚の頭が並んでいるのを見た時、春に行った韓国の市場を思い出しました。韓国の市場も公設市場と同じ様に豚の頭がズラッと並べてありました。ここは日本なのか？外国なのか？

錯覚その 4 は、沖縄の異文化に触れた時に感じました。最終日に残波で本場の三線の演奏を聴いた時に、琉球王国時代の文化の名残を感じました。沖縄音楽は沖縄音階という独特な音階から作られているのですがすぐに分かりませんが、私はこの沖縄音階が大好きです。もちろん普段はいろんなジャンルの音楽を聴いて癒されていますが、沖縄音楽からは違った安らぎを得ることができます。不思議な力を持つ沖縄は日本なのか？日本ではないのか？

書き出したらきりがありません。沖縄は私にとって、とても不思議なところでした。そして学ぶことがとても多いところでした。この沖縄の旅では主に戦跡を見て回り、少し精神的に辛い時もありました。又、追体験をしても何も感じる事ができなかった時には、そんな自分を責め、落ち込むこともありました。しかし当に戦争の時世に生きた人々は、逃げることもできず、もっと辛い思いをしていたに違いありません。戦争が起こり、たくさんの人の命が奪われたという歴史はもう変えることはできません。消すこともできません。では私達は何をすべきなのか？それは、この旅に行った一人ひとり考えたことが違うと思いますが、私は戦争の歴史を美化したり歪めるのではなく、ありのままを後世に伝えていくことだと思います。そこには戦争の恐ろしさだけでなく、人々の繋がり、団結の心、沖縄の素晴らしさが含まれることでしょう。そうすることで沖縄がちゅら島として続けられるのだと思います。

最後に読谷から残波に移動するときに乗ったタクシーの運転手さんとの出会いの話をします。私は自由行動の日にお土産などの買い物をするため、国際通りに行っていました。そして最終宿泊先の残波に戻ろうとタクシーを探し始め、最初に見つけたタクシーには「交代時間が迫っているから」と断わられてしまいました。そしてその次に見つけたタクシーの運転手さんは、「交代時間が遅れてしまうけれど、いいよ。」と言って乗せてくれました。とても感じのいいおじさんだったので、私は沖縄のいろんなことについて聞いてみました。すると、おじさんは沖縄の名所や名物、方言や文化について話してくれ、地名の読み方クイズもしてくれました。また昔基地で働いていたという経歴をお持ちの方だったので、基地問題は特に力を入れて話してくれ、現地民にしか分からない問題や、基地がなくてはならない理由を話してくれました。「沖縄には基地がないとやっていけない。リスクを上回る収入を基地から得ることができる。基地を返還してもらって、その土地で仕事を興してみても、基地から得る収入の十分の一にも満たないだろうからね」と、寂しそうに話してくれたおじさんの顔が印象的でした。私が沖縄の旅で見えてきたところの話や好きな沖縄歌手の話をする時、「あなたは沖縄人ではないのに、一番沖縄人らしいね。結婚式をする時は沖縄に来て、沖縄の衣装を着てやるといいよ」と言ってくれました。どこまで本当の話か分かりませんが、私はとても嬉しかったです。旅の醍醐味は「人との出会い」にあると思っている私は、最高の出会いをできたと思います。ホテルに着く前に「また沖縄に来る時はうちのタクシー会社に連絡をして、私の名前を言ってくれば行くからね」と言ってくれ、降りる時には一緒に記念写真を撮りました。その写真は一生の宝物です。一期一会という言葉がありますが、私は一期一会、一期三会としていきたいと思います。

この沖縄で得たものを全てここに書く事はできませんが、多くの人に感謝を述べたいと思います。特に、この沖縄の旅に一緒に行ったみんなにはとても感謝しています。大きな思い出と一緒に作ってくれて、ありがとう。また一緒に何かしたいね！

沖縄から帰ってきて

国際学科3年 山田 裕佳

最近、戦闘機の轟音が耳につくようになった。今まではただの飛行機と思って気にしなかったものが、沖縄から帰ってきて横浜校舎上空にも戦闘機が飛んでいる事を思い知らされた。

沖縄は、道産子の私としては日本の両極端、北と南、憧れの土地のひとつでした。授業で沖縄問題を扱ってから、戦争の事、自然の事などにとっても興味が沸き、平和を考える旅の参加者募集を見た時、これは行くっきゃない、と一目ぼれ。一人申し込みという事も有り、微妙にヒトミシリーな私としては多少の不安があったものの、帰ってきて「最高だった」と我が選択にあってはくれます。

青い海・かんかん照りの太陽・ゴーヤの故郷としてただ漠然と憧れていたのですが、「憧れ」という言葉だけであらわすのはいかんと感じました。特に戦跡、ガマに入った時のあの空気、あの苦しさはなんとも言い表せません。あんな気持ち初めてでした。戦争と言えば教科書上で習うモノ、外国でやっているコト、日本ではもう終わって私には関係のないこと……だったのですが、沖縄へ行き、終わった事ではないと感じた事が一番大きかったように思います。

ひめゆり記念館で、「あそこの写真の女の子は、爆弾にやられて死んだ私のお友達」とお話してくれた語り部のおばあさんが、何回もここで話しているはずなのに、涙を浮かべて話してくれたのが、すごくドキッとした。

うまく言えないけれど、今まで私が思う資料館たる物は、過去の産物が展示してあり、死んだ人の写真も、手が届かないような位の人や、かなり昔の人だったりというはずだったのに、あそこにあった亡くなった学生たちの写真の左から2番目は彼女の友だちなんだと思うと、とても複雑な気持ちになった。また、おばあさんが、戦火の中生き延びられたのを導いてくれた人と言っていた中曽根先生のコメントが伊江島の資料館にあった時はびっくりした。

私が今まで感じていたように戦争は過去のコトではなくて、ここでは現実に、まだ過去のことではないんだと感じた。それが自分の中で大きかったです。

戦争の残した重さを感じつつも、北山荘の海は最高だし、ごろ寝も最高、台風だって最高、食いもん最高、シークワサー最高、さんぴん茶最高、パイナップルパークのパイナップル食べ放題最高、佐喜真美術館休館だって入れちゃう最高、じんぶん学校超最高、沖縄弁最高、三線 Night 最高、沖縄の旅のみんな最高！！って感じで、沖縄の旅を思い出すと楽しくなつてわくわくしてくる。

最初の心配をよそに、かなかな・ヒッキー・山ちゃん・ちぐ姉率いる沖縄旅隊は、みんなとってもいい人たちで、楽しくって、いろんなこと考えて、みんな毎日泡盛飲んで、皆さんと知り合いになれて嬉シーサー絶対また沖縄いく！！と意気込んでいます。沖縄最高！！

大学生活で学んだこと

社会学科4年 小野 真理子

4年間ある大学生活も、残りあと2ヶ月あまりとなりました。今思い返すと、いつの間にこんなに経っていたのだらうと不思議に思います。

大学に入学した頃は、クラスがなかったり授業も組まれていないというような、それまでの学生生活からは一変したこの環境に、不安でいっぱいでした。横浜キャンパスのあのグラウンドから校舎までの道を、「地に足がつかないってこんな感じなんだ」と実感しながら歩いていたのを思い出します。今思うと、それまでに感じたことのないそのような不安は、急に目の前に現れた、膨大な選択肢に対する戸惑いから起きていたのだと思います。それまでもさまざまな選択をしてきたわけですが、選択の幅はそれほど広くなかったように思えるし、また整えられ安定した環境に浸かっているところも多く、受動的でいられた部分もあったように思います。

しかしそれが大学に入ると、「もう受動的ではいられない」という焦りや不安に変わっていきました。大学に入ると選択肢は一気に広がります。だからこそ期待も大きくなるのですが、大学では強制されることがほとんどない分、自分から何をやるかを決め、動いていかなければ何も始まりません。提供の場はたくさんあっても、それを与えられるまで待っている、それらに気付くことすらなく過ぎ去ってしまいます。たくさんある提供の場を有意義に利用するもしないも自分次第だと感じるがありました。

大学生活を振り返って本当に不思議だな、大切だなと感じるものがあります。それは人との出会いです。卒業を前にこれまでを思い返してみると、「あの時にあの人と出会っていなかったら、今の自分はないな」とか、「こんな楽しくて充実した大学生活を送ってなかったかもしれない」と思うことがよくあります。そのひとつにサークルがあります。私は現在バレーボールサークルに入っていますが、これもある人との出会いがなければ違っていたかもしれません。

私は中学、高校と思う存分バレーボールをやってきたので、大学ではもうバレーはやらないと決心していました。しかし大学の入学式にひとりで参加した私が、思いきってはじめて声をかけた人の誘いをきっかけに、バレーボールサークルの見学に行き入部しました。それからもうサークル

が、私の生活の中で大きな位置を占め、ここで出会った仲間たちが、私の大学生活をより楽しく有意義なものにしてくれる、かけがえのない存在になりました。

人との出会いは本当に不思議だと思います。少しでも時間や場所、声をかけるタイミングが違えば、出会いも、その後の生活もまったく違うものになってしまいます。大学生活を通じて、たったひとりの人との出会いがもたらす影響力の大きさを実感し、出会いの不思議さを感じる出来事を繰り返すごとに、出会いの一つひとつを大切にしていきたいと思うようになりました。

大学に入ってしばらくは新しいことだらけで、まわりの環境もどんどん変わっていくという感じでしたが、いつの間にかそのような変化もおさまり、定着していました。そんな時に新たな出会いの場、活動の場を提供してくれたのが、明治学院大学宗教部でした。

高校の修学旅行で行って以来、沖縄好きだった私は「沖縄から平和を考える旅」を知るとすぐに参加することにしました。それまで私はあまり冒険をせず、安定型を好むほうだったので、今でも突然参加したことが不思議なのですが、これをきっかけにさらに大学生活が充実したことは間違いありません。この旅では、沖縄の自然を体験することはもちろん、その他に戦争跡地や米軍基地、資料館、戦時中に人々が非難していたガマなどを訪れることによって、肌で戦争の悲惨さ、そして命の尊さを感じ取ってきました。そしてこの旅で得たものは、旅が終わった後も、お互いを支え合っていける仲間です。この旅で命の尊さを感じ取ってきたからこそ、一人ひとりの存在の大きさ、大切さを確かめ合うことができ、お互いを認め合っていける仲間になれたのだと思います。

この1年後には、また新たなかけがえのない出会いがありました。去年の夏に行なわれたフィリピンワークキャンプに参加したメンバーとの出会いです。私たちはフィリピンの村に1軒の家を建てるという共通の目標を持ち、それを達成することができました。その過程には、お互いの協力と支え合いがあり、そしてフィリピンの人たちとのすばらしい出会いがありました。参加した誰もが、メンバーとの出会い、そして遠いフィリピンの人たちとの出会いに、人との出会いの不思議さ、すばらしさを感じ、大切にしたいと思ったはずです。

私はこの他に、宗教が深く結びついているフィリピンでの生活を通じて、

「宗教とは何だろう」「人はなぜ信仰心を持ち、集うのだろう」という疑問を持ちました。この疑問はこの大学に通っている間にも度々感じていたことでもあるように思えます。フィリピンでは教会のミサに参加する機会があったのですが、この時も感じていました。

私はこのミサの最後に交わされた、ある言葉がとても印象に残っています。それは「Peace with you」という言葉です。これはミサの中で私が唯一聞き取ることができた言葉です。しかしこれを聞いたとき、最後に交わされたこの短い言葉に、そこに集う人たちのすべての想いが込められているのではないかと感じました。そしてこの言葉に私の疑問を解くヒントがあるように思えました。

大学には人との出会いを提供してくれる場が本当にたくさんあるし、私はそれに恵まれていたと実感しています。私にとってそのひとつが宗教部であったように思います。3年の夏に「沖縄から平和を考える旅」に参加し、4年の夏に「フィリピンワークキャンプ」に参加したことで、私の大学生活はより充実したものになりました。

大学生活を通じて得たものは、これからも支え合い、互いに成長していける仲間であり、学んだことはそのような人たちとの出会いのかけがえのなさ、大切さだと思います。これからも今までに出会った人、そしてこれから社会に出て出会う人たちと、ぜひお互いが「Peace with you」と想い合える関係を築いていきたいです。

チャペル奨励集

天に富をつみなさい

《マタイによる福音書 6 章 19 - 21 節》

斉藤 栄一

私たちは誰でも、自分にとって大切なものを持っています。それは、他人から見ると高価なものであるかもしれないし、とるにたらないものであるかもしれないし、あるいは、この世にひとつしかないものかもしれないし、ごくありふれたものであるかもしれない。どちらにせよ、それがものである以上、いつかはいたみ、傷つき、あるいは失われてしまうでしょう。そのような状況のもとにある「物」をたよりにし、心のささえにしたとしても、私たちはほんとうに安らぎをえることができるでしょうか。

大事にしているはずのものをついっかり壊してしまったり無くしてしまったりしたとき、誰でも当然、心を痛めます。そして「物」というのはなんとはいかないものかと、あらためて思います。それはお金についてもまったく同じです。苦勞してバイトでためたお金を、ちょっとした気のゆるみから、あとから考えるとなんとつまらない物に使ってしまったと、後悔したことのない人はいないでしょう。かといって、それならお金をできるだけ使わずにケチケチとため込むのが一番よいのでしょうか。言うまでもなく、お金というのは、たんなる紙切れ、たんなる金属のかたまりであり、あるいは通帳に印字された数字以外のなにものでもなく、それが何かに変換されてはじめて価値をもつのであって、お金それ自体が価値をもっているわけではありません。絶海の孤島に打ち上げられた遭難者にとって、ポケットの中の1万円札は何の意味ももちません。

この世に生きているかぎり、私たちはさまざまの「物」にとりかこまれており、どうしても特定の「物」を大事にしてしまいます。あるいは、どうしてもなにがしかのお金を大事にしてしまいます。これは、現実の世の中にあってはあていど仕方のないことではあるでしょう。しかし、ほんとうに大事なものは「物」でしょうか。あるいはお金でしょうか。そういった「物」に、あるいはお金の「私の心がある」などと言えるでしょうか。

よく言う言い回しに「いくら巨万の富を得ても、それをあの世に持って

いくことはできない」というのがあります。人は裸で生まれてきて、結局は裸で死んでいくのです。

とすれば、この世にいるあいだ、この世の「物」に心を奪われ、「物」の奴隷になってしまうことなく、あるいはお金に心を奪われて、お金のことばかり気にかけて暮らすのではなく、自分の人生にとってほんとうに大事なものは何なのかを見極めながら生きていきたいものです。

それでは、人生にとってほんとうに大事なものはなんでしょう。イエスは「富は天につみなさい」と言われました。また「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」とも言っておられます。地上のものはすべて、やがては朽ち、失われてしまいますが、天に積まれた富はいたんでしまったり、盗まれてしまうことはありません。それでは、天に積むべき富とはなんでしょう。それについては、ペトロが答えを与えてくれていると思います。ペトロの手紙 第1章23節以下に次のように語られています。「あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることはない言葉によって新たに生まれたのです。こう言われているからです。『人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。』」これは、イザヤ書40章6節以下をふまえていますが、私には同時に、イエスが荒野で、サタンからの誘惑を受けたときに言われた言葉である「人はパンだけで生きるものではない。神の口からでる一つ一つの言葉で生きる」を思い起こさせます。

朽ちたり、失われたりしない唯一のもの、天に積むべき富、それは主の御言葉のみであるということをお互いにあらためて銘記したいものです。

文学部教授（西洋美術史）

2002年7月4日奨励

友を思う時間

《マルコによる福音書 4章 26 - 29節》

坂口 緑

また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。

これは、「成長する種」のたとえです。希望にみちあふれた聖句の一つです。種まきという労働は、すぐには結果がでないかもしれない。けれども、「土はひとりでに実を結ばせる」のだし、「穂には豊かな実ができる」。だから、芽を出した、出さないといってとりたてて騒ぐ必要はない、という意味なのでしょう。

私はこの「成長する種」のたとえの話を母教会での説教をとおして学びました。そのとき同時に学んだのは、この聖句にも顔を出す、聖書の時代の不思議な時間の感覚についてでした。27節にこのような一文があります。「夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長する」。この「夜昼、寝起き」という順に、現代人の多くは違和感をもつのではないのでしょうか。「夜昼、寝起きしているうちに」。これは、私たちの考える生活のリズムとはまったく異なります。現代人の多くは、一日は朝から始まると考えます。ですから、一日の生活を「朝、昼、晩」という順に考えます。さあこれから一日が始まると思うのは、決まって朝の時間帯です。けれども、聖書の時代を生きた人々にとって、一日が始まるのは夜でした。創世記第1章第5節には次のようにあります。「夕べがあり、朝があった」。時間の感覚が異なるのです。

朝起きて、さあ一日が始まるという時、私たちは何が「始まる」と考えているのでしょうか。これから大学に行って講義を受けなくては、今日こ

そ残った仕事を片づけなければ、様々な用事を抱えて毎日を暮らしている私たちは、朝を活動開始の時間だと考えます。昨日と今日とを区別するのは、何かの活動を始めてそれを終わらせることであって、たくさんの活動をするに充足した気持ちになったり、片づけられなかった用事が残っていると不安な気持ちになったりします。用事や労働や仕事や活動そのものに、意味があると思っているからです。けれども、マルコによる福音書第4章第27節に記された「夜、昼、寝起き」という順からは、聖書の時代を生きる人々が、必ずしもそのようには考えていなかったことがうかがえます。一日の始まりは日暮れからと考えた主イエスは、まず休むことから始めるよう、このたとえをお話しになりました。まず休む。そして休んだり働いたりしているうちに、どうしてそうなるのか知らないけれど、種が芽を出して成長する、と語られる。昨日と今日とを区別するのは、人間の活動ではなく休む時間なのだということを、「夜昼、寝起き」という時間の流れで示しているのです。それは私にとっては耳の痛いたとえ話でした。

私は今、毎日考えることがあります。ひとりの友人のことです。彼は私の親しい研究仲間で、同じ学問領域の議論ができる友人です。一緒に論文を書いたこともありますし、これからも一緒に本を書こうと、企画しています。しかし彼はいま鬱病をわずらい、入院しています。病気になってから一年になります。何度かお見舞いに行きました。メールや電話で連絡はとっています。けれども、話を聞けば聞くほど、ほんとうにつらくなり、どうすれば彼の病が癒えるのか、どうすればまた元の生活に戻れるのかを、毎日思い悩んでいます。

病院では、たくさんの薬を処方されるそうです。薬は体調や精神のゆらぎをとりあえず抑え、安定をもたらすようです。昨年のはじめ、体調不良に見舞われて、彼は数年ぶりに田舎の実家に戻りました。病の深刻さが判明したのもその頃のようなようです。それは自慢の一人息子が、東京でがんばっていると思っていたご両親にとって、たいへん大きなショックだったようで、3人家族は一時期、引きこもるように暮らしていたと聞きます。私も電話で何度かご両親と話をしましたが、いつも「ご心配をおかけしてはいますが大丈夫です」という気丈な返事が戻ってきました。昨年4月まで、そんな調子で3人家族は久しぶりに一つ屋根の下で暮らしていました。ところが今年の6月になって、私は突然、入院している友人から思いがけない知らせを受け取りました。ご両親が亡くなった、というのです。発作的

に自ら命を絶ったというのです。入院先の病院からろれつのまわらない口で、涙ながらに友人は報告してくれました。病院は緊急事態とみて、本人に今までにないほどの薬を与えました。一日、数時間しか意識がはっきりしないような強い薬です。それ以来、彼は病院で暮らしています。

二年前、私は友人とともにワシントンDCで開催された研究会に出席しました。研究会が終わったあと、一緒にスミソニアン歴史博物館を訪れました。そこにはアメリカに住む、様々な国からやってきた移民たちが、移民してきた当時、どのような暮らしをしていたかをマネキン人形と舞台装置のようなセットで再現したコーナーがありました。アフリカからつれてこられた黒人が、奴隷として足かせをはめられてトウモロコシや綿花を収穫している展示がありました。日本からの移民の展示もあって、粗末な小屋の土間に火鉢を置き、魚を炙っている、みすばらしいボロボロをまとった人形がありました。博物館には、大声ではしゃいでいる社会科見学の小学生が大勢いましたが、移民のコーナーはとくに不人気な一角だったようで、人形もセットも古びていて、誰も近寄らない、見捨てられた展示でした。けれども、友人はその展示をひとつひとつ丁寧に、しかも涙を流しながら見て回っているのです。たしかにその展示は、アメリカに住む人々が、実に多様なルーツをもっているのだ、ということを感じ起こさせる教育的なものでした。研究会で知り合った人たちが、とりわけ研究会で流暢な白人英語が飛び交うなか、わざと黒人なまりで質問をしてパネリストをどきりとさせているアフリカ系の研究者も、母親が日本人だと自己紹介してきた日系アメリカ人のとびきり頭の回転の速い大学院生も、このようなルーツを経てこの場にいることを思い起こさせる、そのような展示です。友人は、そのようなことを、きちんと感じ取ることのできる感受性をもった研究者です。

彼は今、薬を服用しています。薬のおかげで彼の精神は安定しています。自殺未遂をはかったりすることはありませんし、普通におしゃべりもできます。けれども、薬は容赦のないほどに彼の想像力を奪います。感情的な起伏がおこらないように、何かに感情移入できないように神経がブロックされているそうです。そのため、彼は本を読んでも漫画を読んでも映画を見ても楽しめず、一定の時間を集中して過ごすことができないと言っています。それはあのように真っ当で鋭い感受性をもって研究に没頭していた者にとって、ほんとうに大きな苦痛です。ほんの一年前まで、毎日本屋に

立ち寄っては新刊書を買って、アパートの床が本の重みで抜けるんじゃないかと心配していた人が、今は一冊の本も手に取ることができないのです。

聖書の言葉に戻りましょう。成長する種のたとえ、たしかにこれは希望の言葉です。種まきという労働は、すぐには結果がでない。けれどもその結果がでないことだけを取りたててさわぐことがない、と語っています。もちろん、この種まきという比喻は、一義的には伝道を意味しています。すぐに出ない結果に焦らなくても、いつかかならず必要ところに神の言葉が届けられる、という希望です。けれども私はこのたとえ話が、どうしても友人を思うと焦ってばかりいる自分のことを言い当てた言葉のように聞こえるのです。すぐには結果がでない、と主イエスは私を戒めているからです。けれども同時に、種は知らないうちに芽を出すのだと主イエスは言われる。待たなければならないのだと思います。それは友人にとっては、まずは休むことから始めなさいという意味であり、友人を見守る私にとっても、まずは待ちなさいという意味なのでしょう。「朝、昼、晩」の価値観で考えてしまう私にはとても困難なことです。早く一年前のように、研究に、仕事に戻ってほしいと考えてしまうからです。けれども、友人も私も、今は、休まなければいけない時間を迎えているのだと思います。何かを始めるとしたら、それは活動ではなく休むことなのだと思います。しばらくのうちは、とにかく希望のうちになんとか休んだり待ったりできるよう、この聖句があるのだらうと言い聞かせるしかありません。そのような気持ちでこの聖句を読んでいます。

社会学部専任講師（生涯教育論）

2002年11月5日奨励

上を向いて歩こう

《ヘブライ人への手紙 1 3 章 8 節》

小田島 太郎

最近、駅でも、道路でも、キャンパスでも下を向いて歩く人が、急に増えました。がっくりと肩を落としてというのではなく、携帯電話や PHS を見ながら歩くからです。これは人間の普通の歩き方ではありませんし、また危険です。「対向して歩いてくる人が自分に気をつけるだろう、あちらから避けてくれるだろう」と、無意識・無自覚に期待しているのです。他者の注意を当てにし、甘えている、と言えます。日本はまだ比較的安全ですから、これで済んでいるのでしょうか。私がときどき行くドイツで、人が前を見ないでどんどん歩いてゆく光景など、見たことはありません。ヨーロッパでは、自分の身の安全は他者を当てにせず、自分で確保する、という考え方です。アメリカでも事情は同じだと思います。歩くときは、しっかり前を向き、向こうから歩いてくる人に、こちらが注意をはらい、よろこんで道を譲れるだけの余裕と親切な心を持ちたいものです。しっかり前を向いて歩きましょう。

前を向いて歩くことから、次に少し目を上げて、「上を向いて歩く」ことを考えましょう。「上を向いて歩こう」とは、1961年にヒットした歌の題名です。永六輔作詞、中村八大作曲で、坂本九が歌いました。六、八、九と面白いですね。なぜ上を向いて歩くのかというと、それは「涙がこぼれないように」です。いい歌ですが、また悲しい歌です。実は、もっと積極的な意味で、「上を向いて歩く」ことができるし、またそれが必要です。それは、「永遠なる存在」に心の視線を絶えず差し向けながら生きるということです。「上を向いて歩む」といったほうがよいかもしれません。

私たちの現実には、実にこまごました事柄から成り立っています。皆さんの生活を考えてみましょう。毎日、電車を乗り継ぎ、遅刻しないで大学までたどり着く、曜日ごとに次々と別の授業に出て、予習・復習・宿題をし、レポートを期限までに出す。試験があり、単位が取れるかどうか心配し、また部活があり、バイトがある。これを続けるかどうか悩む。友達づきあいから小遣いの残りのことまで考えれば、頭を悩ますことばかりです。下

宿ならば、心に掛かることに切りがありません。買った野菜を腐らせない工夫から始まって、明日の朝食のこと、掃除・洗濯、親元への連絡、部屋代の支払いなどを考えると、眠れない夜もあります。家族を持ち、職業をもつ社会人ならば、なおさらです。高齢者には、今の私たちに想像もできない、もっと別の心配があるに違いありません。実生活は、老若男女を問わず、このような細事の集積であり、残念ながら、これが人間の日常です。私たちは、こうした日常の必要に心を奪われて生きているのです。しかし、これでよいとは誰も思いません。何か足りないことがあります。そうではないでしょうか。ところがこの日常の中で、どこにいても、どのようなときでも、上を向いて「永遠なる存在」を思うことが、実際に出来ます。日常が、余りにも忙しく、重く、はかなく、無意味に見えれば見える程、私たちには「永遠なる存在」に眼を差し向けることが必要になってきます。

皆さんは、「永遠なる存在」を思うことと「上を向いて歩む」こととはどう関係するか、と問うでしょう。実際に私たちが「永遠なる存在」を思うとき、知らぬ間に、私たちの腰は伸び、背中シャンとし、首筋は真っ直ぐになります。頭は上を向きます。心の目だけでなく、身体全体が上方志向となります。世界各地で「永遠なる存在」は「上なる存在」、「崇高なる存在」とされてきました。「上」や「高み」などの表現は、そのような存在を求め、その存在に触れる時の人間の身体における形と深く関連しているに違いありません。日本語の「神」も「上(かみ)」ということと関係すると思います。「永遠なる存在」を思うことは、事実として、上を見上げることに繋がるのです。

先ほど読んだ聖書には、こう書いてあります。「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」。「永遠なるキリスト」を思いながら生きる時、日常の些事のなかにあっても、心の眼は絶えず上方へと差し向けられ、おのずと私たちの背筋はピンと伸びます。「キリスト」が皆さんの中に、まだはっきりとした像を結ばないとしても、それは構いません。誰でもその気になれば、「永遠なる存在」を探り求めることはできると、私は思います。それから始めればよいのです。その先は、「永遠なる存在」そのものが、皆さんを導いてくれるはずで、「永遠にして崇高なる存在」に視線を注ぎ、「上を向いて歩もう」ではありませんか。

文学部教授(キリスト教学)

2002年10月22日奨励

“Meeting Needs”

《Matthew 14:13-21》

Sean ODANI

The Bible passage we just read today is about helping people and meeting needs. Meeting needs mean seeing that people need help, and then reaching out to help them.

In this story, Jesus hears some bad news. He feels sad and so he gets in a boat to go to a quiet place. What is the bad news? His friend had just died. His friend's name was John the Baptist. John was actually the cousin of Jesus and had baptized Jesus. John was a good man, but Herod, the ruler of the area, didn't like him. Herod had John put into prison and later had him executed.

It is always sad to hear when someone dies, but in this case Jesus was especially sad. John was a young man, a little over 30 years old. Also, he was a good man, and had done nothing to deserve his execution.

Naturally, Jesus wants to be alone, however, at that time he was extremely popular. When the people hear that he had gotten into a boat, they decide to follow after him.

Jesus arrives on the other side of the lake, and when he gets out of the boat he sees a crowd of people. Jesus then feels compassion for them. This is an amazing reaction. How do you feel when you see a crowd of people?

In Japan there is a group called SMAP. SMAP is a very popular group. When people see the members of SMAP, they follow them. A while ago there was a problem. One member of SMAP, Goro, was in Tokyo. Suddenly a crowd came around him and he panicked. He drove away in his car but hit a woman police officer. In Goro's case, when he saw a crowd he ran away.

Jesus is different. When Jesus sees the crowd he feels sorry for them. He sees that they need help. He takes action and heals their sick.

We can see that Jesus wanted to help them. Here we can see a principle of meeting needs modeled by Jesus--sometimes meeting needs requires a sacrifice. Jesus, though He was sad, helped others. He was sad that his cousin had died; yet Jesus had special eyes. We can say call these the "eyes of Jesus." Jesus saw that people needed help and He helped them.

For the remainder of the day, Jesus helps the people. Evening comes. His disciples, the 12 followers of Jesus, come and speak to Him. "It's late and this is a deserted place. Send the people into the villages so they can buy food," they say. They think it's a good time for everyone to leave.

When we read the Bible, it helps to think about what the situation was like in those times. In the times of the Bible, there were no convenience stores. There were markets where people could shop, but they were located inside the towns and cities. This place was a deserted place. There was nothing. At night, wild animals might come out. It was a dangerous place at night.

Jesus, however, tells his disciples to wait. He says, "The people don't need to go away. You give them something to eat."

The disciples do not fully understand. They tell Jesus they have only 5 loaves of bread and 2 fish. Jesus tells them to bring the food to Him. Here we have a principle of Christian giving--Christian giving involves giving all that one has. The disciples had 5 loaves of bread and 2 fish. They didn't say to Jesus, "We have 2 loaves of bread and 1 fish." They told Jesus what they actually did have, 5 loaves of bread and 2 fish, and they brought everything to Jesus.

In this story we can see another principle of Christian giving--when we give something to God, He uses what we give Him to bless others. Jesus tells the people to sit down. He takes the 5 loaves and 2 fish and prays. God then multiplies the food. Jesus gives the food to his disciples, and the disciples distribute the food to all the people. Over 5,000 people are able to eat. The disciples didn't think that the 5 loaves and 2 fish were much, but when the food was offered to God,

God used the gift to bless others.

Recently in my life I received some blessings at Meiji Gakuin University. Two weeks ago, I was waiting for a bus to go home. It was cold. I came into the Religion Office and a staff member was inside. I asked if it would be OK to wait inside and the staff member said it was ok. It was already late that day, nearly 6pm. The staff member was kind to let me come in because it was probably the time when the staff member needed to go home.

I came inside the office and sat down. The staff member noticed that I was not feeling well and said, "I'll call the Health Office for you. I think a nurse is still there." The Religious Center member called the Health Office and sent me over.

When I arrived at the Health Office, a nurse was there. She said to come in and she measured my temperature. It was 38.7C. She handed me some medicine. This nurse seemed to have "the eyes of Jesus." She asked, "Would you like some hot tea?" I said, "Sure." The nurse noticed also that the medicine she gave me needed to be taken after a meal. She then said, "I have some bread from lunch. It's not much, but if you eat it you may feel better, and then you can also take the medicine." I accepted the bread. It was not a big piece of bread, but like the 5 loaves and 2 fish in the story, this piece of bread was a great blessing.

After eating the bread, I took the medicine. I felt well enough to return home. I will never forget the kindness of these two university staff members. Even though it was late in the day they were willing to help me.

Hopefully, this story can help us remember the Bible reading today about the compassion of Jesus. May we have His eyes, "the eyes of Jesus." May we be able to see the needs of other people and make the effort to help them.

Lecturer (English)

May 23, 2002 Chapel Service

ボランティアの心って？

《マタイによる福音書 25章 31 - 40節》

大島 隆代

皆さんは、ボランティア活動をしたことはありますか？この中には、今現在しているという方も含め、大勢いらっしゃるでしょう。「ボランティアをしてみよう」と思う動機は人それぞれ違います。また、「ボランティア」というキーワードを通して、様々な気持ちや感情が存在し、そして動いていくものだとも思います。今日は、ボランティアの心ってどんなものなんだろうということについて、私の思ったことをお話いたします。

ボランティアは自主的な活動である、とよく言われます。ギリシャ語の「ボランタス」が語源で、「義勇兵」「志願兵」を指していたそうです。目の前にいる、社会的に弱い立場の人を助けようと、手を差し出すことがボランティアならば、生活しやすい地域を作るために、法律を変えようと運動することもボランティアです。また、あの9・11に、ワールドトレードセンターに飛行機ごとぶつかっていくという行動をおこした人達も、何かを信じて自ら動いた、という意味では「ボランティア」と言えるのかもかもしれません。

ボランティアには、動く側、働きかける側と、結果としてその思いや行動を受け取る側が存在します。決して一方通行のものではありません。だからこそ、その行動が決してプラスのみでないことや、誰かを幸せにすることへの限界を見せつけられる、という現実もあるのです。

ここに、車椅子で生活をする人が書いた詩をご紹介します。と思います。

『ボランティア拒否宣言』

それを言ったらオシマイと言う前に

一体私に何が始まっていたと言うの

何時だってオシマイの向こうにしかハジマリは無い

その向こう側に私は車椅子を漕ぎ出すのだ

ボランティアこそ私の敵
私はボランティアの犬達を拒否する

ボランティアの犬達は 私を優しく自滅させる
ボランティアの犬達は 私を巧みに甘えさせる
ボランティアの犬達は アテにならぬものを頼らせる
ボランティアの犬達は 残された僅かな筋力を弱らせる
ボランティアの犬達は 私をアクセサリーにして街を歩く
(中略)
ボランティアの犬達は 私の我がままと頑なを確かな権利であると主張させる
ボランティアの犬達は ごう慢と無知をかけがえのない個性であると信じ込ませる
ボランティアの犬達は 非常識と非協調をたくましい行動だと煽りたてる
ボランティアの犬達は 文化住宅に解放区を作り自立の旗を掲げてたむろする
ボランティアの犬達は 私と社会の間に溝を掘り幻想の中に孤立させる

私はその犬達に尻尾を振った
私は彼等の巧みな優しさに飼いならされ
汚い手で顎をさすられた
私は もう彼等をいい気持ちにさせてあげない
今度その手が伸びてきたら
私は きっとその手に噛みついてやる

ごめんね
私の心のかawaiiそうな狼
少しの間 私はお前を忘れていた
誇り高い狼の顔で
オシマイの向こう側に
車椅子を漕ぎ出すのだ

(おおさか・行動する障害者応援センター機関紙『すたこらさん』より)

私は、この詩を読んだ時、ボランティア活動を推進する仕事をしている者として、ショックを受け、「ボランティアっていいものだよ」と伝えるこ

とが、少し恐くなりました。そして、ボランティアなマインド(心)には、必ず責任が伴うのではないかなと感じました。この詩のような気持ちも存在するのが現実である、と知るの大切なことだと思います。その上で、自ら何かを信じて行動することや、その行動の結果がどうなるのかを見つめ続けていくことが、ボランティアに限らず、生活を営む上での「責任」のように感じます。与え、与えられるというだけのバランスではなく、双方向に働く力があってこそ、様々な「思い」や「心」が開くのではないのでしょうか。

私自身を含め、皆さんが「ああ、やってよかった」と思える行動、その行動によって誰ひとりとして悲しむことがないような社会に生きる幸せを、これからも見つけ続けていきたいと思っています。

ボランティアセンター・コーディネーター
2002年5月8日奨励

愛すること

《ヨハネ第1の手紙4章7 - 12節》

大塩 光

「愛する」とは、恋人達が使う言葉だけれど、夫婦になると絶対使わなくなるというような悲しい現実があります。しかもかなり自由に生きられる今の世の中では「愛してやっている」なんていう言葉や「愛されてやっている」なんていう、考えられない言葉も飛び交います。

教会では、愛という言葉はとても重要なものです。男と女の愛に限らず、人間は愛し合って生きて行かなければならないという教えを神から受けていますし、私たちが愛しあうのは神がまず私たちを愛してくださっているからなのです。ですから愛されているもの同士、愛しあうことが正しいことだというわけです。

以前横浜のある教会にいた時に、高校生会で「神の掟」という言葉を使って何か感じることを書くというプログラムがありました。その中で一番多かったのは「聖書を読んで、イエス様の教えに従うこと」というような内容だったと思いますが、ただひとり、それも一言だけ「愛し合うこと」と書いた子がいました。まさしくその通りだと思うのです。

アッシジの聖フランチェスコが残した平和の祈りの中に「神よ、愛されることを求めるよりも、人々を愛するものとしてください」という一節があります。彼はとても偉大で歴史に確かな足跡を残した人ですから、その言葉には重みがあります。私も是非そうありたいとも思います。しかしよくよく考えてみて、皆に話す時にこう思うようになりました。「人が生きていく限り、世の中は決してそれだけで成り立っているのではない」と。私はこう思います。「人生では、人を愛することの素晴らしさも、人から愛される喜びも同じように大切に尊いことである」と。

愛し合うということは、具体的には次のようなことだと思います。お互いにいたわりあうこと、お互いに励ましあうこと、みんなで優しさで支えあうこと。それと人はどうしてもあやまちを犯すものですから、お互いに赦し合うことも具体的な愛の行動です。それと十分に語り合うこともその

一つだと思います。つまり人間として生きるということは、人と共に生きるということであり、お互いに大切にしようこと、それが愛し合うということの本当の意味です。

私たちが人間は皆それぞれ違った道を歩んで来ていると思いますし、また性格も個性も違うと思います。大切なことはその「違い」を認めあい、尊重しあうということです。そこからこそ寛容で豊かで緩やかな関係が築き上げられることでしょう。自分の正しさという物指しで相手を測り続けていたら、やがては人を排除するようになります。それは違いを認め合うという謙虚な姿勢とは程遠いと言わなければなりません。

神は人を、すべての人間を「違う存在」として造られました。一人一人違うということこそ、神が与えてくださった最大の豊かさであるということを理解できた時、私たちは家族や友人をはじめとして周りにいる人たちが、この世にたった一人しかいない大切な存在であるということが分かるのです。

その思いをお互いに分かちあえるならば、そこにこそ真実の豊かな愛が育まれていくのだと思います。そしてイエス・キリストはこう言います。「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と。つまりイエス・キリストという人は、まず何よりも、どんな人であっても、人を愛して、大切に思ってくださいる方です。神が大切にしてくれている者同士、大切にしようというのが私たちのあるべき姿ではないでしょうか。

蒲田新生教会牧師

2002年5月7日奨励

神様の計画

《エレミヤ29章11節》

水野 由香

こんにちは。社会福祉学科一年生の水野由香です。今日は「神様の計画」という題でお話させていただきたいと思います。

突然ですが、みなさんは自分の人生に対してどんな計画をもっていますか？どんな人でも自分の人生に対して色んな計画をもっていると思います。実現が可能なものもあるだろうし、実現するのが不可能に思えるような計画もあると思います。それらの計画は何のために立てていますか？

私は自分の人生に対する大小さまざまな計画はすべて自分が幸せになるために立てるのではないかな、と考えています。自分が幸せになるために立てた計画がうまくいかなかったとしたらきっとすごく苦しいと思います。しかしうまくいったとしても、自分が思っていたほど嬉しくなかったりすることもあると思います。その計画が自分にとって重要なものであればあるほど、失敗したりうまくいっても思うような結果が得られなかったりしたらそれほど苦しいことはないでしょう。

私は、高校受験も大学受験も、第一志望の学校に合格することはできませんでした。落ちたときは本当にくやしくて、一人で部屋にこもって泣いていたことを覚えています。そんなときに教会の人が私に教えてくれたのが今日の聖書箇所です。もう一度今日の聖書箇所を読みたいと思います。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。- 主の御告げ - それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

私の両親はクリスチャンで、私はクリスチャンホームに生まれ育ちました。小さい頃から教会に通っていて、誕生日などのたびに教会の人から聖書のことばをもらったりしていましたが、この受験のときも例外ではなくこのエレミヤ書のことばが書かれたカードを励ましの言葉と一緒にもらいました。

私はこの聖句を読んで、最初はすごく納得がいきませんでした。神様の

計画が平安を与えるための計画なら、なぜ私は第一志望の学校に落ちたんだ？とずっと考えていました。これは受験だけに限らず、色々な物事がうまくいかなかったときよく感じていたことでした。

私にとって、そして多分みなさんにとっても自分の計画がうまくいかないとき、それが「平安を与えるための計画」であると考えすることは難しいと思います。どちらかというと「わざわざ」と感じるのではないのでしょうか。私も受験に失敗したときそう感じました。自分は自分にできる限りのことをしたのに、決して高望みしたわけではないのに・・・とっていました。でも結局高校も大学も、私は第一志望の学校ではなく入学した学校でよかったと今は思います。高校では本当によい出会いがたくさんあって、かけがえのない友達がたくさんできました。

大学は大学で、まだ入学して8ヶ月しか経っていないけれどたくさんの出会いがあって、ステキな友達がたくさんできました。第一志望の大学に行っていたら今私の周りには会うことはできませんでした。そうしたらきっと今の私はいません。私は自分の周りにいる人たちが本当に好きだから、会えなかったらと思うととても悲しくなります。

私はこのまわりにいるたくさんの人たちとの出会いが、単なる偶然だとは思っていません。神様が出会わせてくれた出会いなんだと思います。今の友達と出会わせるために神様がずっとずっと前から計画して、導いてくれた結果なんだと思います。

神様の計画は、色んな出来事の渦中にいるときには見えないときが多くて、「自分の行いが悪いせいだろうか」とか考えたりしてしまうけれど、後になってみると神様が私のことを祝福するためにいろいろな出来事が起きて、私が立てた計画がうまくいかなかったりもするということがよく分かります。自分の計画と神様の計画が違っているとき、自分の建てた計画はうまくいかないものです。でもすべてのことは神様があなたに平安を与えようとして、また将来と希望を与えようとして起こさせていることなのだとことをみなさんに知って欲しいと思います。

また神様は遠くから私たちに対して計画しているわけではないということも覚えておいて欲しいです。私の好きな詩に「Foot Prints」という詩があります。アメリカのマーガレット・F・パワーズという人が書いた詩です。礼拝の始めに歌った曲の元となった詩です。最後にこの詩を読みたいと思います。

Foot Prints

ある夜、私は夢を見た。私は、主とともに、なぎさを歩いていた。
暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出された。
どの光景にも、砂の上に二人のあしあとが残されていた。
一つは私のあしあと、もう一つは主のあしあとであった。
これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、
私は砂の上のあしあとに目を留めた。
そこには一つのあしあとしかなかった。
私の人生でいちばんつらく、悲しいときだった。
このことがいつも私の心を乱していたので、私はその悩みについて主にお尋ねした。
「主よ。私があなたに従うと決心したとき、あなたは、
すべての道において私とともに歩み、私と語り合ってくださいと約束されました。
それなのに、私の人生の一番辛いとき、一人のあしあとしかなかったのです。
一番あなたを必要としたときに、
あなたがなぜ私を捨てられたのか、私にはわかりません。」
主はささやかれた。
「私の大切な子よ。私はあなたを愛している。
あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みのときに。
あしあとが一つだったとき、私はあなたを背負って歩いていた。」

社会福祉学科 1 年

2002年12月10日奨励

いろいろなひきだし

《ヨブ記5章8 - 11節》

天野 愛子

今日は「いろいろなひきだし」という題でお話をしようと思うのですが、これはわたしの表現方法で、いろいろな知識や経験があって人間的に深い魅力のある人のことを“いろいろなひきだしを持っている人”というふう
に現すことからつけた題です。いろいろなひきだしを持つことは、ずいぶん前から、わたしのモットーというか、目標のようなものになっていて、なるべくいろいろなことをやってみようようにしています。

大学生活の中でできたひきだしのうち、特に強く印象に残っているもの、その後の生活に大きな影響を与えているものは3つあります。“パラグライダー”と“フランス”、それから“アフリカ”です。

パラグライダーは、大学のサークル わたしは明治学院大学の卒業生で、いまでも活動しているカラーフィールドというサークルに所属していたのですが そのサークルではじめて空を飛ぶという体験をしました。足が浮いたときの不思議な感じ、浮く怖さ、空の世界をはじめて体験して、違う世界に踏み込む楽しさに気づいてしまったような気がします。

それで味を占めたわけではありませんが、フランス文学科だったわたしは3年の夏休みに外の世界を見てみたいと思い立ち、ほとんどフランス語が話せないにもかかわらず、一人でフランスに夏期短期留学をしました。出発した時の語学力は本当にひどいもので、フランスの国内便に乗り継ぐときに、ターミナルの番号(2D)が聞き取れないほどだったのが、2ヶ月ほどの滞在で語学は日常会話程度になり、何とかしようと思えば何とか成る、海外といっても恐れるほどの事はないことを学んで帰国しました。

この後、自分の進路を決めかねて迷ったあげく、自分の方向を決める前にまだ知らない第3世界と呼ばれる世界を見ておきたい、絶対にその必要があると思い立って、フランスで知り合ったアフリカ在住スウェーデン人の友達のところに行ってみました。

行った国はウガンダという、東アフリカの世界で一番エイズ患者の多い国でした。わたしはカルチャーショックというよりもっと根源的なショッ

クを受けながらも6週間の滞在ですっかりはまってしまいました。

帰国してもしばらくはとりつかれたような状態で、その熱を持ったまま就職活動をして、最後にはアフリカ関連の専門学校に就職しました。それも、アフリカのことを熱心に話すその様子がかわれて入社を決めてくれたそうです。そこは世界各国のスタッフがいる楽しく刺激的な職場でしたが、入社後経営が傾きだして1ヶ月後にリストラ開始、2ヶ月後には給料の分割払いと借金の取立てがくるようになり、結局3ヶ月後に倒産してしまいました。

このとき、大学の就職課イベントにまったく参加せず就職活動をしたことを悔やみながら再就職活動したのですが、最終的に明治学院の募集を新聞で知って応募、就職する事になって、いろいろなこと、就職の失敗や自分の迷いなどはすべてその後につながっているのだなあと感じました。

今思い出すと、大学生という限りなく思えるほどの時間をもっているときだったからこそ、十分に迷ったり立ち止まったり、また走ったりすることができたのではないかと、特に、留学やアフリカ滞在などは、学生だったからこそ思い立ってすぐに実行できたことだと思います。

いま、仕事を始めて5年目ですが、一日の大部分を仕事に費やす毎日を過ごしていると、時間を有効に使うことばかり考えてしまいます。みなさんはまだ大学生で、時間を有効に使わない贅沢も許されています。社会に出てからはできない、一見無駄に見える時間の使い方でも、いろいろなことを体験して、ぜひ心の中にひきだしをたくさん作ってみてください。わたしもせっせとひきだしを作ろうとしていますが、そうすることで自分を深め、自分というものがもっと見えてくると思います。

また、経験を重ねる中で、本当に迷って立ち止まったまま動けなくなってしまった時、みなさんには学内に学生相談センターがあるので、そういうところに相談してみてもいいと思います。でも、時間だけが解決するような問題、たとえば自分が本当に行きたいと思っていた就職先から内定が出なかった時、本当に好きな人をあきらめなければいけない時、自分でどうすればいいかわかっているのに心がついていけないような場合には、大きな存在、私の場合は今日の聖書にあったように神様ですが、そういう存在に身を任せてみるのもいいと思います。

情報センター 2 課

2002年12月4日奨励

なぜ沖縄なのか

《ルカによる福音書 15 章 1 - 7 節》

金井 創

宗教センターでは毎年8月に「沖縄から平和を考える旅」を行っています。これはもともと大学宗教部が始めた企画で、その年によって韓国、フィリピン、台湾などの外国や、沖縄などに旅して平和スタディツアーを展開してきました。2001年より主催を宗教センターに移し、当分の間沖縄に行きつづけることにしています。

ではなぜ、沖縄なのでしょう。それは沖縄がいろいろな意味において私たちを映し出す鏡のような土地だからです。

第一は「平和」についてです。日本は第二次大戦後平和憲法のもとに少なくとも直接武器を取って戦争はしてきませんでした。その意味では戦後57年平和な社会であったと言えるでしょう。しかし、沖縄はその平和の質について考えさせる場所です。沖縄の面積は日本全体の0.6パーセント。その小さな土地に在日アメリカ軍の基地・軍用地の75パーセントが集中しています。まさに「基地の中に沖縄がある」という状態です。

たとえば極東最大の空軍基地である嘉手納基地。これは三つの町村にまたがっていますが、その一つ嘉手納町などは町の85パーセントを基地に取られていて、残りの15パーセントに住民が暮らさざるを得ません。従って住宅事情も悪く、騒音にも日々悩まされることとなります。

このように基地の存在そのものが、日々の暮らしや経済を圧迫しているばかりか、米軍兵士・関係者による犯罪も戦後ずっと続発してきました。女性・少女への暴行など表面に出るのはその一部でしかないといえます。

こうした状況の一端にでも触れた時、私たちは果たしてこの国が平和だと言えるのか、鋭い問いを突きつけられます。沖縄の犠牲の上に私たちの平和があることを見つめざるをえないのです。もちろん内地にも基地はあり、その地域では同じような問題で苦しむ人々がいます。しかし、沖縄ほど集中的に問題が現れているところはありませんし、基地被害の質も異なっています。ですから、沖縄に身を置くことによってこの国の姿が見えてくるのです。

また、沖縄は第二次大戦中、国内では唯一の地上戦が行われた土地です。内地でも空襲で多くの人が命を落としました。しかし、沖縄はそうした空襲に加えて生活の場そのものが戦場になるという経験をしました。これは当時の軍部が本土決戦に備えて、できるだけ長く連合軍を沖縄に引き止めておくためにとった「捨て石作戦」のせいです。そのために沖縄住民の犠牲が激増しました。実に県民の四分の一が亡くなるという多大な犠牲です。しかも戦闘に巻き込まれて命を落とした人ばかりではありません。「集団自決」という強制された集団死によって、あるいは住民を守るはずの日本軍の手によって殺された人々もいます。

その悲惨な戦争の爪あとは今もなお至るところに残されています。そして人々の心の中にも。沖縄の戦跡にはいわばメジャーになっているところとそうでないところがあります。しかし、その重さは変わるものではありませんし、ガイドブックに載っていないようなところにも重い過去の事実が証しされています。私たちはそのような場所に立って、実は沖縄のすべてが戦跡であることを実感するのです。

戦争を肯定し、国のために命をささげることが価値とした教育が結果として何をもたらしたのか、実際に戦争が起こったら誰の命が最も犠牲にされるのか。平和とは単に戦争がない状態なのではなく、戦争に向かう歩みそのものを阻止することも不可欠なのだということを、沖縄の経験を通して私たちは教えられます。

第二は「自然」についてです。沖縄というと青い空、青い海、白い砂浜、サンゴ礁といったイメージが浮かんできます。私たちの旅もこうした豊かな自然にたっぷり触れる、もしくは浸ることも大切にしています。ただ普通、沖縄に行くというリゾートホテルを拠点としてマリンスポーツを楽しんでくるのが一般的だと思いますが、私たちの旅はできるだけそうした人工的な環境を避けてまさに自然そのものに出会うことを心がけています。

南国の自然が人のかたくなな心をとかし、あるいは癒してくれるのを実感します。ところがこのような豊かな自然すらも、沖縄の環境特性を軽視した内地主導の公共事業によって、また米軍基地建設によって破壊されてきました。私たちを癒してくれる自然が癒しがたい傷を負わされていくのを見るのはしのびないことです。こうした破壊を前にして「今ならまだ間に合う」と言った沖縄の人がいます。内地に帰る私たちがそれに対してどう応えられるのか、そのことも課題として持ち帰らねばならないものです。

第三は「人と文化」についてです。沖縄は数百年の間「琉球王国」として独自の文化を育んできた土地です。沖縄県という一地方自治体とはちがう、文化と伝統の深み、豊かさがあります。私たちの旅はできるだけ様々な人との出会い、対話、交流を通してそのような文化に触れることを目指しています。それは同時に内地の文化を問い返されることでもあります。

首里城のすぐ近くに沖縄県立博物館があります。沖縄の自然・歴史・文化を知るのに適した施設です。その展示品で内地の資料館や各地にある郷土館と際立った違いが一つあります。それは武器が一つも展示されていないということです。内地の場合はたいがい、昔の武将のよるいや刀、銃砲類が展示されています。しかし、沖縄の場合はありません。琉球王国は武器を持たない国だったからです。薩摩による支配はあったものの、全く武器を持たない国が数百年存続し得たこと自体、奇跡のような気がします。

その「守礼の国」、「命どう宝」の国が最も悲惨な地上戦に巻き込まれ、戦後も強大な米軍に居座られ続けているのは皮肉なことです。

様々な出会いや経験を通して、私たちはこの国が果たして平和な国と言えるか、この国にまことの正義はあるのか考えさせられます。聖書は告げています。正義のないところに平和はないと。ただしこの場合の正義とは、正しさの主張とは違います。もっと広い意味をもった言葉で、社会の中で力を持たない人々、抑圧されている人々、そのままでは権利をないがしろにされかねない人々の人権を守り、尊重し、恵みのわざを行うことなのです。

だからたとえば、だれか一人がいじめられていて人知れず涙を流している。そしてその人の犠牲の上にそのグループなり集団なりが表向き平穏であったとしても、そこに平和はないのです。それと同じようなことを私たちは沖縄の旅で問われます。そう、たしかに私たちの国は平和とは言えないと。では内地に帰ってきた私たちが、それぞれの暮らしの場で、大学での学びの生活を通して何をすべきか。自分の生き方につなげていく勉強をどのようにして深めていくのか。一週間あまりの旅はその問いに向き合うきっかけの一つなのです。

学院牧師

2002年7月9日奨励

伸 展

《フィリピ3章12 - 16節》

手塚 奈々子

『私は、既にそれを得たというわけではなく、すでに完全なものとなっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟達、私自身はすでに捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。だから、私たちの中で完全なものは誰でも、このように考えるべきです。しかしあなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことをも明らかにして下さい。いずれにせよ、私たちは到達したところに基づいて進むべきです。』

ただ今読みました聖書箇所は、これを書いた使徒パウロの人生における彼の生き方がよく出ているところ。「既にそれを得たというわけではなく、すでに完全なものとなっているわけでもありません。...なすべきことはただ1つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走る」とあります。また、「到達したところに基づいて進むべき」とあります。今日、この聖書の箇所を選んだのは、もうすぐ卒業を迎える学生に向けて贈る言葉としてふさわしいと思ったからです。伸展して行ってほしいからです。

使徒パウロの生き方は、無限な神に向かって無限に成長していくという生き方です。既に与えられている恵みに基づいて、神は無限ですから、無限の神に向かって無限に成長していくということです。これが使徒パウロの生き方であり、クリスチャンの生き方なのですが、同時にすべての人にもあてはまると思います。クリスチャンでない人にも通じると思います。

私たちは、生活している時、正確には今現在のことしかわかりません。今何をしているかということだけです。私たちは手帳を持ち、今日はこれこれのことをしようとか、この後何してこれしてと計画を立てています。しかし人生、計画通りには行きません。予定が駄目になるということはよくあることです。こういう毎日のことについてもそうなので、ましてや人生全体については、まったくわからない、悲観的に言えばお先真っ暗とも言えるし、楽観的に言えば人生はバラ色とも言えると思います。

例えば、自分の例を出しますが、私は高校生から大学3年生の時まで「スチュワーデスになる」つもりでした。叔父2人が航空会社に勤めており、かなり強気にコネがあったので、スチュワーデスになるつもりでした。そして私は小さい頃から飛行機が大好きでした。本当は子供の時パイロットになりたかったのです。ですが、残念なことに、父から子供の時に「女の子はパイロットになれない」と言われ、仕方なくあきらめたのです。それでしょうがないからパイロットの奥さんになろうとっていました。大きくなって、職業選択の時、スチュワーデスをめざしました。両親もとても喜んでいました。スチュワーデスの両親は飛行機がタダになるからです。大学に入る時、勉強するならキリスト教と決めていましたが、でも就職はスチュワーデスと決めていたのです。

ところが、大学4年生になって、キリスト教を本格的にやり始めようと思ひ、大学4年生で大学院受験の方に人生の進路を切り替えました。大学院に行きましたが、身内の病気で病院に通うことがあり、その時、机の上の学問はダメだと思ひ、実践活動をし始めました。大学院を中退しました。大学院1年で中退し、それは3月でしたので、秋の就職戦線にのるつもりでした。家庭教師のアルバイトをしていました。秋にどこに就職するか、わかりませんでした。とにかく働いてキリスト教活動をしていこうと思ひていました。でも生活する内に、私には祈りと労働と学問が必要だと気づきました。私には信仰を支える学問というものが必要であるとわかり、再度大学院に戻りました。しかし、以前哲学でしたが、今度は神学を選びました。

そして今、大学でキリスト教の教師として働いています。職業は教師ですが、身分は結婚しないシスターになりました。というか、結婚相手は目に見えないキリストになりました。スチュワーデスになって、パイロットのお嫁さんになろうと思ひていた奈々子ちゃんの夢は、キリスト教の教師

となつて、キリストのお嫁さんになることになってしまいました。

今の自分の立場について、子供の時、高校の時、そして大学3年生の時、そして一度大学院を中退した時には、そして大学院に戻った時でもとても想像がつかないことでした。

人生は、本当にわかりません。人は私に対して言いますが、シスターはスチュワーデスのようなもので、教会という飛行機が無事に神の国にたどり着くようにお世話するようなものだ、シスターは結婚しないのではなく、キリストと結婚しているのだから、教会のパイロットであるキリストと結婚したとも言えると言います。でもこんなこと、当時本当のスチュワーデスになってと夢見ていた私には、想像がつかなかったことです。

私の人生を例として出しましたが、言いたかったことは、人生は全く予測がつかないということです。何が起るか、全くわかりません。どういう形で自己実現できるか、わからないのです。

若い時には、誰でもとても純粋な一本気なところがあり、思いつめるところがあります。そこに良さもあり、そして見えないところもあります。思いつめると自分の世界の中だけで人生を決めてしまつて、まるで自分の頭が絶対であるかのように全部決めてしまう危険があります。もうだめだとかあきらめることもありますし、暗くなると先のことが信じられなくなります。でも現実には、自分に見えていないところがいっぱいあるのです。自己評価にしたつて、自分で知っているところと自分で気づいていないで他人が知っているところがたくさんあります。

ジョハリの窓と言うのですが、人の心を4つに分けます。自分しか知らない部分、自分に見えないで他人に見えている部分、自分も他人も知っている部分、神が知っている部分です。独りで落ち込んで考えていると、自分しか見えない自分の部分だけで考えてしまつて、その狭い部分ですべてを決定してしまいます。しかし、ジョハリの窓の分析が当たっているかどうかは別にして、現実に自分に見えない自分の部分があることは確かです。自分は冷たい人間だと自分で思い込んでいても、他の人は自分の優しい部分に気づいてくれていることもあるし、逆に自分はよい人間だと多少うぬぼれていても、他人は自分の欠点を知っていて本当は見逃してくれていることもあるのです。

ましてや自分は、毎日変わっていくのです。肉体的に言つても、細胞はどんどんつぶれていき、どんどん婆になっていきますが、精神的にも変化

していきます。昨日の私と今日の私では経験が違ふし、新しいこと、新しい人に出会つて、また同じ人でも違ふことを体験しているから、心も変わつてきているのです。肉体が刻一刻と婆になっていっているのと同じように、刻一刻と私たちの心も変化しているのです。

ですから、何でもこうだと決めつけるのは危険なことです。私たち個人が知っているのは、小さな一部分に過ぎません。決めつけないようにしましょう。皆様の人生は、これからです。信頼して、今日だつてこれから何があるかわかりません。一時の感情におぼれなくて、失敗を恐れなくて、前向きに生きていきましょう。変化するということは、マイナスの意味もありますが、プラスの意味もあるのです。毎日成長できるのです。明日何があるか、わからないのです。信頼してゆだねていきましょう。

そして今日の聖書にあるように、「到達したところに基づいて」、成長していきましょう。大学の4年間、無駄だったのではないのです。有意義だったと思う人もいるでしょうが、無駄だったと思う人もいます。でも4年前の自分と違ふのです。自分の判断だけを絶対視しないで、大きく見ていきましょう。今までの毎日生きてきた積み重ねの上に今の自分はあります。経験豊かになっているのです。これから何があるか、わかりません。私自身も大学4年生の時、シスターになるだなんて大学の教師になるだなんて、こうなるとは思つてもみませんでした。ましてや大学院を中退した時の私には、今のことは想像がつかせませんでした。どうか、これから皆様も何があるかわかりませんから、どうか御自分を信じて今まで生きてきた自分を信じて、将来をゆだねて前向きに成長して生きていって下さい。

祈祷：祈祷いたします。主よ、今までの歩みに感謝します。どうぞこれからも私達を見守つて、導いていって下さい。私達が信頼して、自分より大きなものに自分をゆだねて成長することができますように。アーメン。

社会学部助教授（キリスト教学）

2003年1月14日奨励

目からうろこのキリスト教

《使徒言行録 9 章 10 - 19 節》

鍛冶 智也

『明治学院 日本はじめて物語』というパンフレットを御覧になったことはありますか？明治学院の関係者による「日本で初めての×××」の話を集めて紹介した冊子です。ここには、明治学院の前身であるヘボン塾が「日本で初めての男女共学の教育機関であった」と紹介されており、ヘボンは、日本で初めて目薬を処方し、義足を作ったとされています。他にも、国内初の新聞の発行やミシンの利用方法を教えた初めなど、いくつかの「はじめて物語」が記されており、面白い読み物になっています。また、明治と年号が替わる前からこの地で活動し、この学院を創設することになるキリスト教のミッションが、そしてその宣教師たちから学んだ日本人たちが、キリスト教を媒介にしながら、どのように西洋文化を伝え、日本文化に定着させていったのかを、垣間見ることのできる資料ともなっています。

キリスト教の宗教的な行事が、今日のいわば文化的な「儀式」ともなっており、日本に定着しているものの一つに、キリスト教式の結婚式があります。このチャペルでも、毎週末、結婚式が行われており、明治学院の卒業生であれば、ここで挙式が可能ですが、日本で最初のキリスト教式の公的婚礼もまた、この明治学院と密接に関係があります。

1965年、昭和40年から、学生同士の交換留学制度が始まり、明治学院大学の交換留学としても最も歴史のある制度の一つであるアメリカのホープカレッジとの留学制度があります。アメリカのミシガン州ホランドにありますホープカレッジは、この明治学院を創設したアメリカのミッションでもあるオランダ改革派教会の設立した大学です。この意味で、そもそも姉妹関係にある大学なのですが、このホープカレッジに最初に学んだ日本人学生として、津川良蔵がいます。彼は、1869年にはこの大学に通っていたという記録があります。彼は、帰国した後、今日横浜共立学園として知られている、当時のミッション・ホームで教鞭をとっていましたが、1880年に海岸教会で栗村左衛八と小山さいの結婚式の司式をします。

これが日本で最初のキリスト教式の結婚式であるという記録があります。

津川と同時期にホープカレッジで学んだ同窓生の一人に、木村熊二という人物がいますが、彼は後に、台町教会、現在の高輪教会の牧師となります。そして、彼は、当時明治学院普通学部本科の学生であった島崎藤村に洗礼を受けた牧師として知られています。津川や木村の他に、最低でも3名の同時期の同窓生がいるのですが、どうやら彼らは日本の地で、キリスト教教育に携わり、キリスト教文化を日本文化に紹介する役回りを果たしているようです。そこに、必ず明治学院の名前が上がってきます。明治学院は、さまざまな意味で、キリスト教、あるいはキリスト教文化が、日本文化に出会う橋渡しの役を果たしているという事例です。

「あることをきっかけとして、急にものごとの真相や本質が分かるようになる」ことを、「目からうろこが落ちる」などと言いますが、この出典は、今お読みした聖書の箇所です。このように、日本語の日常的に使われている表現のなかに、聖書が、あるいはキリスト教の用語が元になっているものは、少なくありません。たとえば、「狭き門より入れ」は、「楽で安易な道を選択すべきではなく、困難でも正しい道を進むべき時」などに使われますが、新約聖書マタイによる福音書7章13節の「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」という箇所からきています。

また、「十字架を背負う」なんていう表現も、「罪の意識や悲しみを身に受け持つ」際に使いますが、いよいよイエスが処刑され、十字架につけられた時、「イエスを十字架につけたのは、午前九時であった」（マルコによる福音書15：25）などと記された話から由来しています。処刑としては、十字架につける前に、むち打ちを加えた後、手足を十字架に釘付けにして、後は死ぬまで放置するという方法で、最大限の苦痛を与える処刑方法です。あるいは、「迷える羊」という表現は、夏目漱石の『三四郎』にでてくるので、知られるようになったとされますが、イエスのたとえ話に由来しています（ルカによる福音書15章1 - 7節）。

「あなたを愛しています」の「愛」という言葉も、キリスト教の愛についての考え方が大いに影響しています。もともと、仏教用語として「愛」という言葉はありましたが、その意味は「欲望」に近く、むしろ否定的に使われていました。仏教用語としては、「慈悲」などが肯定的に用いられ

ていたわけです。ですから、キリスト教の宣教師たちが「愛」を説いて勧めたため、伝道の当初は、大いに誤解を受けたようです（山本秀煌「伝道の草分」『日本伝道めぐみのあと』アルバ社書店、1930年）。しかし、キリスト教の伝道活動の広まりと共に、「愛」という概念も変化し、現在のよう理解になってきました。これは、キリスト教の影響です。

一方、キリスト教の用語から派生していますが、日本語の意味と聖書における意味が全く逆というものもあります。たとえば、「目には目を」という表現があります。ハムラビ法典にもこの表現はありまして、「害を与えられたら、それに相応する復讐をすること」の譬えに使われることが多いと思われまゝ。しかしながら、聖書において用いられている意味は、全く逆の意味です。「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせない。だれかが、1ミليون行くように強いるなら、一緒に2ミليون行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」（マタイによる福音書5章38 - 41節）ここでは、二重の鍵カッコになっていますので、他から引用しています。その元になっている箇所は、旧約聖書に何ヶ所か書かれています。一種のルールブック、法令集のような書に申命記がありますが、この19章21節には、このように書かれています。「命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足を報いなければならない」。

この時代、復讐、リベンジの際には、たっぷり利子を付けて返して、落とし前をつけるのが通例で、それをむしろ限定して、「目には目を」という規律をかけています。すなわち、「目には目以上のことをするな」ということなのです。それに対して、さらにイエス・キリストは「目には目を、もするな。復讐には、「愛」をもって報いよ、と宣言しているのです。ここで価値の大転換を行っているのです。ですから、キリスト教における「目には目を」は、否定的なまなざし、乗り越えるべき視点で語られているわけであって、復讐の正統性を主張するものではないのです。

この例のように、キリスト教が本来伝えようとしたメッセージが、日本文化のフィルターを通すことで、意味が変化してしまう言葉、概念、思想というものも、実は少なくありません。今週水曜日の夕拝の時間に語られ

た「茶の湯とキリスト教」（2002年10月23日）の関係のように、日本文化とキリスト教文化は、親和性の高い分野ばかりだとは限りません。日本文化とキリスト教が相剋する、対決する場面も、実は見られるのです。

「和魂洋才」という言葉はご存じだと思います。もともと、「和魂漢才」という考えがあって、明治以前までの文明文化の輸入過程で、文明の中心である中国から伝来する学問を日本固有の精神により活用する、という考え方です。これは菅原道真（845 - 903）が、『菅原遺戒』の中で最初に使ったと言われております。明治期以降、これをもじって使われるようになりました。すなわち、「日本固有の精神をもって、西洋の学問・知識を学びとる」ということの意義を示しています。

周知のように、江戸期までのキリスト教を禁止することを目的とした鎖国政策を、日本が幕末についに放棄し、開国するに至ります。キリスト教を拒否するために鎖国したのでありますが、キリスト教を積極的に受容するために開国したわけではありませんでした。ペリーが来航し、日米和親条約を1854年、安政3年に締結しましたが、キリシタン禁制の高札は1873年、明治6年になるまで依然として立ったままでした。開国してからキリスト教を黙認するまでに約20年の歳月が必要だったのです。ですから、もちろん、開国は内発的な理由によるものではなく、アメリカやヨーロッパからの軍事的圧力、外交的な力による外発性によるものでした。

和魂洋才の指針を最初に示した先駆的思想家の一人に佐久間象山は、儒学から洋学に転向し、「東洋の道德、西洋の芸術」という標語を掲げ、「東洋の伝統的道德と西洋の実証的技術という、それぞれの長所を摂取し、両者を兼ね備えることによって、日本の独立と国力充実をはかろうという主張」をいたしました。この主張の背後には、知識、技術に対する日本の劣等感と、大和魂の西洋に対する優越感が、ないまぜになった複雑な心理がうかがえます。

しかし、ここで私が指摘したいのは、魂と才、すなわち精神と知識は分離できると理解していたところです。精神と知識を分離することによって、より充実した知見が開けると、当時も、そして今日までも、考えられていることです。実は、いかなる知識も技術さえも、固有な精神的な土壌なしには生まれ得ないのですし、成長し得ないのです。また、ある種の精神、思想的背景というものは、特定の知識をバックボーンにしているのです。両者は、密接に関わっていて、分かち難く一つになっているわけです。

今日のインターネット通信という、いわば一見思想とは無縁な技術でさえ、知識はピラミッド型ではなく自由かつ平等なフラット型で流通させるべきであるという思想的背景がなければ生み出されなかった技術であり、この技術がさらに自由と平等を尊ぶ思想を広く伝搬させているわけです。

今日の基本的な政治原理、基礎的な社会の原則であるデモクラシー、民主主義という制度も、単なる思想なのではなく、キリスト教的な人格主義のバックボーンを本来有しています。大正期のデモクラシーの訳語である「民本主義」の旗手であった吉野作造は、「デモクラシーと基督教」(『新人』20 - 3、1919年3月1日)のなかで、こう記しています。「吾々は総ての人類を神の子として総ての人類に一個の神聖を認め、固く基督教に結んで居る。之れ程確実な人格主義の信念がまたと世にあらうか。故に基督教の信仰は夫れ自身、社会の各方面に現れて直にデモクラシーとならざるを得ない訳である。」と書き記しています。

民主主義とは、デモクラシーとは、個々人の意思がまず尊重された上で、さらにその成長と協調がなければ、討議による理解と合意がなければ、決して実現しないものなのです。私のゼミ生など、学生が「民主的」にものごとを決めようとする際に、アンケートなどをして全員に質問を単に投げかけて、多数決をとるということをよく致します。こうした手続きによって、民主的に決定したと学生は信じて疑わないのです。小中高の学校で、もしかすると大学でも、学級会のような場で、ある案件について、「これに賛成ですか？反対ですか？」を単に聞くだけで、採決をとって、その多寡でものごとを決める思想を「民主主義」だと、どうやら小さい時から習ってきてしまっているのです。実は、これこそ和魂洋才の最たるものです。民主主義の思想実現のための手続きの一部を取り出してきて、その知識の一部を利用しているに過ぎないのです。

このように和魂洋才の影響は、いまだなお、生きています。純粹に知識には魂が伴わなくてよいと思っており、魂には知識の背景がなくても良いと思っっているのです。私たちは、こうした「精神なき専門人、心情なき享楽人」(マックス・ウェーバー『職業としての政治』)を、これからもし続けていくのでしょうか？日本文化と基督教の出会いは、こうした部分に、まだまだ課題をもっていると思われます。

法学部教授(行政学)

2002年10月25日奨励